

淨

土

號 月 六



昭和十年五月廿日第三種郵便特認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年五月廿日印刷納本 昭和十六年六月一日發行

第七卷 第六號

陸海軍病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

新發賣

一日二球で健康量

理研製品



肝油を精製した
純ビタミンA D

肝油が効くのはビ
タミンAとDの爲
だと判つてゐる今

日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はあ
りません。本品は肝油から精製抽出したビ
タミンAとDを無味無臭のグロビュール球
に収めた快適な製品——肝油の効果は完全
に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

新製理研ビタミン球は、最近のビタミン學
說に據り、一日二球づゝ服めば完全に生理的
健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千
D一千國際單位を含有させた製品。しかも
青豆ほどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番

品切の節は總代理店へ

理研 ビタミンA D 球



淨土六月號 目次

表紙

鈴木金平

扉・目次カツト

米倉隆從

上人に然

物を聽くの會

小西存祐(五)

郭公の鳴くころ

吉田絃二郎

(六)

趣味筆の知識

脇本樂之軒(三)

俗人俗の記

子母澤寛

(六)

家

佐藤良智(五)

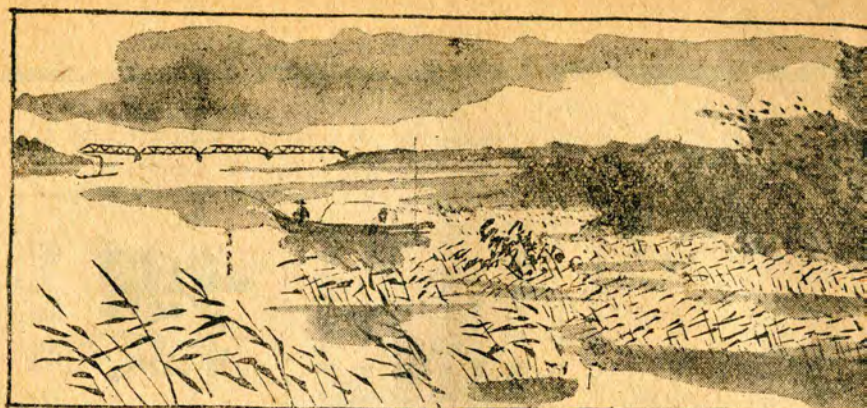
短篇

新

生

坂本節子(五)

三和寺のある附近
小俣眞誠(六)



信

仰

相

談

中村 辨 康 (四)

歌

壇

與謝野 晶子選 (一九)

俳

壇

太田 耳動子選 (二七)

柳

壇

西島 ○ 丸選 (三)

淨土まゐり畫

新漫 畫 隊 (興)

小説 幸

福 一瀬 直行 (三)

先師を
語る

福田 行誠 上人 増谷 文雄 (六)

佛前結婚式の話

中村 辨 康 (元)

會 員 通 信 (五)
編 輯 後 記 (四)

淨土六月號 目次

知恩門主孝譽上人著

櫻寧邨舍詩

水町京子女史

（前略）眞善美の渾然とした世界、これは上人様の御心境の然らしむる處ではあるが、詩人としての優秀な力量に俟たねば到り難い處、私共の渴仰して已まぬ幽玄なるもの、清澄なるものが、こゝには磨きあげられた玉と照り、ふるれば心琴に通ふ韻きを成さうとしてまつてゐる。私共から漢詩を遠のかせてゐる一つのさほりとも言へる所謂白髮三千丈式の表現のないことも私共には嬉しいことである。優れた魂の聲を聴くといふことは、こよない人の世の悦びである。

岡本かの子女史

（前略）私が始めて上人の光顔に接した時は、心から救攝せられてゆく、えもいはれぬなごやかさを感じた。（中略）その詠まれた詩を拜見したときもこの感じはすこしも變らなかつた。いや、一生に變らないだらうと思つてゐる。

題辭

公 爵

徳川家達閣下

四六倍判

上下二卷

上製和裝帙入

序文

文學博士

狩野直喜先生

扉 孝譽上人肖像（寫眞）

序文

文學博士

内藤虎先生

校字 大島徹水大僧正

價貳圓（送料共）

申込所 關通

轉

法

輪

寺

淨土 六月號

六方恒沙の諸佛、舌をのべて三千世界に
おほひて、もはらだ彌陀の名號をと
なへて、往生すといふは、これ眞實な
りと證誠し給ふなり。

法然上人御法語



先 師 を 語 る : 4

福 田 行 誠 上 人

増 谷 文 雄



一

行誠上人は、どんな風姿のお方であつただらうか。わたくしは度々、想像を逞しうして、上人のお姿を心に描いてみたことがあります。

芝の明照會館にある肖像を寫眞にとらせて貰つて、拙著の中に挿入したこともありましたが、それを素描にしたものが、前號の挿畫の一つです。

『行誠上人全集』の前付にある寫眞は、おつむには何にもかむらず、右手に持った錫杖を肩にもたせかけ、稍々左にむけた面の、白い眉が、まことに印象的であります。

『行誠上人全集』序文を書いてある河瀬秀治氏は、その文中に、上人の風貌を描き、行藏を評して、

「顔容甚だ溫和、言行拘はる所なく、灑々落落道遙自在、人呼んで羅漢行誠と稱す。」

と述べてをります。而して、前述の肖像寫眞について見ても、その顔容の枯淡にして溫和なることは、河瀬氏の言はれる通りに見受けられます。

だが、その枯淡な溫顔は、老境に入られてからのことであつてまだお若かりし頃の上人の風姿は、もつと別のおもむきをもつて美事なものであつたと想像されるのです。

曾つて、幕府の大奥に入つて法語をなされてをられた頃の逸話には、大奥の女中どもの中に上人をあこがれる者も少くなかつた

と見えて、歸坊して
衣を解かんとすると
袖の中から、いつも
幾通かの艶書が出て
きたものであつたと
も傳へられてをりま
す。

寫眞から想像して
みても、身丈も高か
つたやうであるし、
鼻目も秀麗であつた
やうに伺へるし、そ
れに前述のごとく、
生れは武藏の國の豊
島で、育ちは江戸そ
だち、その辯舌は江
戸なまりの巻舌であ
つたと聞いてをります。
韃衣をまとふといへども、ま
さに颯たる江戸前の風姿であつたで
あらうと思はれます。



この想像される江戸前の風姿に、學識々見のみ
がきを加へ、枯淡の味を加へたる時、そこに
河瀬秀治氏のいふところの「灑々落々、逍遙
自在」にして、言行はるかに凡俗を超えたる
羅漢行誠が出来たのであらうと思ふのであり
ますが、かく考へてふり返つて見ますと、こ
の上人の洒脱なる言行の中にも、なほ且つ
若かりしころの江戸前が多分に在してある
ことに氣づくのであります。

ごく晩年、知恩院に入つて浄土一宗の管
長となられてゐたところのこと、ある時、各
宗の管長の相會してゐる席上で、

「お互ひさまに、管長などといふことは、
豆腐くらゐしか喰べられなくなつてから、
することでごさるのう。」

と言つてのけて、満座の管長を苦笑させた
こともあるさうですが、その胸のすくやうな
言行は、たしかに江戸つ子の持ち前であると
思ひます。

知恩院では、門主のために朱塗の湯槽があつて、門主が浴してしまふと、すぐとその湯をとりすてて、他の人の用ふることを禁じてゐたといふことでありますが、それほど大切にされてゐる管長の行誼上人が、ある日のこと、突然、今から町の銭湯にゆくんだと申し出されたこともありました。

御承知の通り、自家用の湯槽で浴するのとは異つて、銭湯の氣もちには、また格別なものであります。殊にその情緒は、多分に、江戸ッ子の氣象にびつたりと來るものがあるのです。だから、侍僧などが百方手をつくして止して頂かうとしたが、上人はいつかな肯かず、たうとう四條のあたりのある銭湯に案内を申上げたといふことであります。

この逸話には、その上、その銭湯のかへり途で、饅頭屋の店さきに立寄つて、出來たての饅頭をつまんで召しあがられたといふ話まで附け加はつてをります。果して、そこまでなされたのかどうかと



は思はれますが、ともかく、この銭湯行きは逸話などは、上人の江戸前を遺憾なく露呈したものであると申すことが出来ると思ひます。

三

行誼上人の數かぎりない逸話の中で、わたくしが、最も感銘のかい逸話だと思ふものの一つに、つぎのやうな話があります。

ある時、上人は伊豆の石彌陀へ御參拜になつたことがありました。その歸り道に、箱根の旅亭の石内といふのに立寄つて、午餐を召しあがられました。しかるに、石内の亭主は、その客が三緣

山増上寺の行誼上人であることを知つて、筆硯をそろへて、御揮毫をお願いひ申上げました。

上人は、早速に承知されて、

「では、書いてあげよう。で、南無阿彌陀佛と書かうかな。」

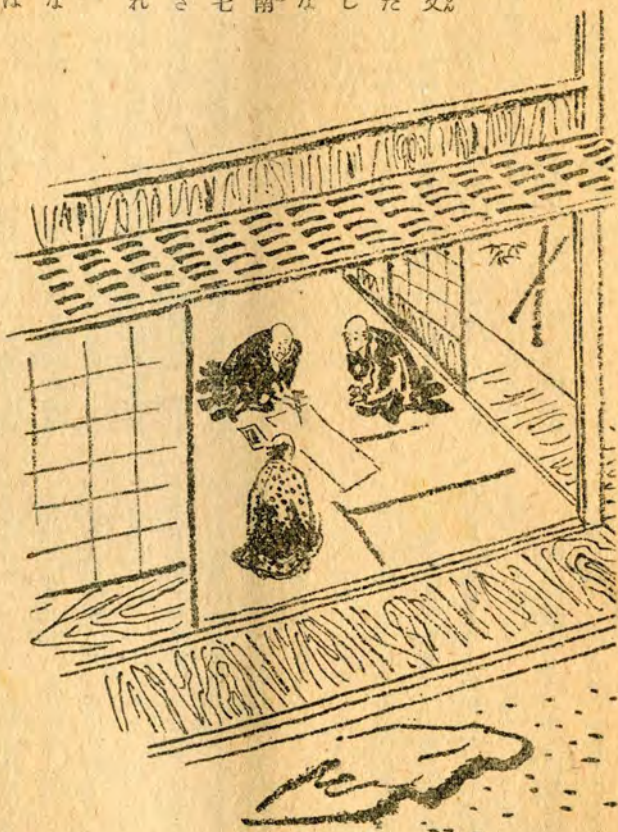
と仰せられると、遠慮のない亭主は、

「わたくしは妙法
ですから、お題目
をお願ひ申しま
す。」

と筋ちがひの注文
を申上げました。だ
が、上人は、すこし
も遲滞するところな
く、さら／＼と「南
無妙法蓮華經」と七
字の題目を揮毫なさ
れて亭主に與へられ
ました。

これは、何でもな
い事のやうにも思は
れるが、淨土門の僧侶、それも三緣山増上寺の貫主ともあられる
方が、平氣で他宗の題目を揮毫するといふことは、よく考へて見
ると、なか／＼、並々ならぬ洒と落とであつたと申さねばなりま
せん。

その後、日蓮宗身延山の門主たる吉川日鑑上人が、やはりこの
石内に泊つて、亭主の願ひによつて揮毫をなされたことがあります。



す。

それとともに、私はここで、行誠上人のいはゆる洒脱が、決し
て單なる洒脱ではなかつたことに、讀者の注意を促したいと思ふ
のであります。

四

した。その揮毫にあたり
亭主の自慢話に、この行
誠上人の話をきいて、日
鑑上人は、ふかく感にう
たれた様子でありました
が、やがて筆を執つて
「南無阿彌陀佛」と六字
の名號を揮毫されたので
ありました。

實にうるはしい逸話で
あつて、古い書物にも、
「後世傳へて佳話一對と
なすべし」と記してあり
ますが、まことにその感
を共にする次第でありま

行誡上人の酒と落とは、決してたよの酒と落とはなかつた。酒ととして言ひ、落ととして行ふ、その言行の背後には、必らず上人のすぐれた識見がひかり輝いてゐたことを忘れてはなりません。

上人の洒脫な言行は、半面においては、前述のやうに、その江戸前の氣象から出たものもありました。それとともに、他の半面においては、それは上人の、高き學識や識見からあふれ出たものであるといふこと、その點を見忘れては、この上人の本當のわうちは、たうてい理解しがたいであらうと思ふのであります。

いまの話の箱根石内亭において、名號の代りに題目を平氣で揮毫されたといふ逸話に就いて考へて見ても、その背後には、實に高邁なる識見が嚴乎として嚴存してゐることを、知らねばならぬのであります。

行誡上人は、よくつぎのやうなことを仰せられ、またその著書の中に書きしるしてをられます。

「全體、何宗の教が廣いとか浅いとか、何經の説が高いとか低いとか云ふても、只其れ自身の宗旨のみの經文の判釋ばかり學び居りては、何宗に限らず凡て其の自分の宗旨の事までが、實は本當に全く分り兼ねるものなり。」

これは、前回に述べた「兼學」の主張であつて、後の通佛教學の精神にかよふものであることも、前回に説いたごとくであります。

すが、この精神をさらに押しすすめて行くと、他面に於ては、宗我宗見に對する批判ともなつて來るのであります。『行誡上人全集』の中の「宗旨之事」といふ一文の中には、こんな言葉も見えてをります。

「動もすれば、世の教法家中、唯だその宗見のみに執着し、その宗見を指してこれが佛法ぢや、これより外に佛法はないなどと云ひ立てて、わが佛法の全體に眼をそゝがず、折角廣大の佛法をけちな佛法としてしまふて、その宗意を誤り、且つこの佛法の大體を失して、識らず知らず、佛法にあらざる外道となり了る。」

今日に於てすらも、なほ宗我宗見に促はれて、まるで外道にひとしい行藏をなしてある人々が、存してをりますが、上人の時代に於ては、それが更に極端であつて、宗祖のことはよく知つてゐるが、教祖釋意のことは、とかくその存在をすら忘れがちであるといふ手が、なか／＼少くなかつたのであります。

その時代にあつて、先づ佛教の全體に着目すべきことを説き、宗我宗見の妄を警告して、佛教界の時弊を匡さんとされた上人の識見は、よほど高く價值づけられて然るべきものであると思はれます。

ある時、行誡上人は、ある禪僧に對して、重誠を與へて、つぎのごとく教へられたことがありました。

「牟尼世尊に宗旨なし、西方世界に宗旨なし、宗旨は人によりて建つ、法はもと無法なり、況や宗旨あらんや。佛は解脱の法を説く、八萬四千種あり、大小半滿あり、此土入聖の道あり、往生淨土の法あり、維摩經に「一音演法隨類各解」と説きたまへり。時に正像あり、人に熟不熟あり、此土入聖は祖師再來の意なり、淨土往生は廬山善導の弘法なり、共に解脱の法をひろむ。佛法をもて宗旨を説くべし、宗旨をもて佛法をとくことなかれ。」

これも、要するに、宗旨をいましめ、佛教を全體として把握すべきことを説いた垂誡であります。が、そもそも釋尊は何宗の方であられたか、一體元來の佛法は何宗であつたのか、上人は、よく好んで、この種の設問をたてられ、その答として、釋尊はもと無宗旨であつた、佛法は元來無宗派であつたといふ反省に徹することとを努められ、その反省を基抵として、各宗一致、六和敬の旨に契當して、まことに廣大なる佛法を恢興せんことが、上人の生涯の理想とするところであつたと思はれます。

しかも、この理想は、行誡上人御自身の周圍においては、ある程度の實現を認むることが出来るのであります。

言ふまでもなく、行誡上人御自身の宗籍は淨土宗にあつたのであります。が、その行藏の實に於ては、なか／＼淨土一宗の埒内にとのみ止まつてはをられなかつたし、また、他宗の人々に於ても、

淨土宗がこの上人を獨占することを許さなかつたのでありました。

例へば、上人はつねに、淨土門の人々もまた、聖道門の佛教の何たるかを知つておくやうにと主張され、御自身に於ても、豊かな禪風を具へてゐられたのでありますが、一方、禪宗の方からは、諸獄交堂、久我環溪、萩野獨國などといふ、禪門第一流の名だたる禪師がたが、この行誡上人を推して以つて、禪門の棟梁としてあがめてゐたものであります。

前回にもちよつと觸れたやうに、上人は、ふかく慈雲尊者の宗風をしたはれてゐたので、たび／＼この尊者の「十善法語」を講義なされたことがありましたが、その講筵には、淨土宗以外の方々も多數に列せられたやうであります。

上野の壽澄和尚のことも、前回に述べておきましたが、この幕末天台の碩學の學解の奥義を了得したものは、淨土宗の行誡上人であるといふことを、天台宗の方でも、充分明白に認めてをりました。更に、この上人に師事し兄事した人々の中には、前述の禪師たちの外、日蓮宗の新井日藏上人、眞言宗の釋雲照律師、居士の大内青巖氏など、明治佛教界の名だたる人物も尠からず、まことに「八宗の泰斗」たるの實を、この上人は、立派に備へてをられたと申すことが出来るのであります。(つゞく)



筆を發明した
蒙恬將軍

東洋の在來の筆、即ち毛筆は明治の末頃から段々と萬年筆に壓倒せられて、用途が少くなつて參りましたが、樂器にたとへて云へば琴や三味線や尺八や太鼓のやうなもので、今日いくら洋樂が日本で發達したと云つても、これと併行して邦樂が依然として重んぜられて居るのと同様に、筆と云ふものも決して廢ることはありません。否、心ある人士は筆でなくては十分なり氣分なりを傳へ得ないとして居る程で、論より證據、いはゆる

筆の知識 (上)

脇本樂之軒

書道は年を追うて盛に奨励せられて居り、早い話が私共が手紙を書くにしても、一寸したことなら萬年筆でも濟ませますが、儀禮的な手紙などになると、どうしても筆を使はなくしては氣が濟まぬではありませんか。所詮萬年筆といふものは實用一偏のもの、筆は日本精神と切つても切れない因縁、歴史のある、ものと高尚なものと申して差支ないでせう。さて近來は人間が全體に科學的智識を求めらるやうになつて、日常使用する物に對してもたゞ漫然とこれを使つて居るだけでは承知せず、少くともそれが如何いふ風にして作られるかと云ふことを考へるやうになりました。

そこで私も一つ毛筆の作り方を説明してみせう。勿論私は筆屋さんではなく、唯だ皆さまでと同じく筆を愛用して居るものに過ぎませぬが、一昨年の夏、ふと東京で現在第一流といはれる名人達の筆を作る様子を目のあたり見せて貰つて、それからひどく筆に興味を持ち出したばかりのことです。

筆に興味を持ち出して段々と調べて見ますと、向島の三國神社の境内には支那でむかしむかし初めて筆と云ふものを發明した蒙恬——この蒙恬と云ふ人は元來武人で、秦の始皇帝に仕へ、世に名高い萬里の長城も此人が築いたと云はれて居ますが、何處までも發明

心の強かつた人と見えて、それまで誰も夢に見たこともない「筆」と云ふものを考へ出しました——その蒙恬を記念する立派な碑も早く建てられて居ることが分りました。

筆屋さんが

お祭りする

蒙恬碑

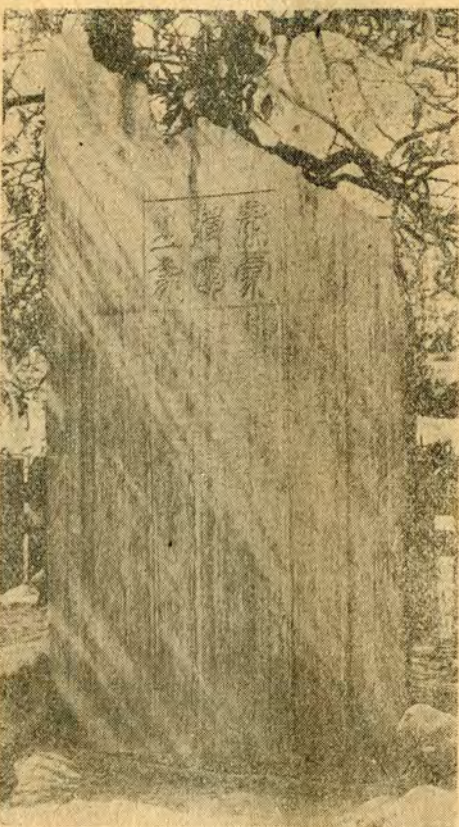
少し前置が長くな

りますけれども、それならば蒙恬碑は誰が建てたかと申せば日本橋の高木と云ふ筆屋の主人、壽願と云ふ人です。

不幸にして此家は跡がうまく續きませんでしたけれども、明治の頃高木と申せば日本切つての大きな筆屋で、看板の中には例の李鴻章が筆を揮つたものもあつたと云ふ程で、私が一昨年始めて筆作りの様子を見せて貰つた井出さんとか、山本さ

んとか云ふ名人、それから現在天皇陛下御用の御筆を作つて差上げられる秋葉氏などもみな高木の職方であつたと申しますから、高木の勢力と云ふものは非常なものであつたらうと思ひます。

この高木と云ふ人はもと／＼三河の出身ですが、如何して巧く手に入れたものか應擧のかいた蒙恬將軍の像をもつて居ました。その蒙恬將軍の像をそのまゝ下の方に彫り、上方に其頃日本に來て居た名高い學者の楊守敬



(三) 蒙恬の碑

に續つて貰つた文章を刻したのが、三圍の碑で、碑の高さは六尺以上もあり、實に堂々たるものであります。

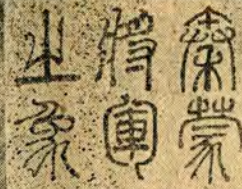
實を申すと壽願は此碑を作つたものの、まだ建てるまでにならない中に歿しましたので

壽願歿後に碑は建つたと云ふことになりましたが、何にいたせ、明治十六七年頃に初めて碑が建つてから今年まで五十餘年、その間には日清戰役などあつて、偶には中絶したこともありましたが、それでも、兎も角も東京の筆屋、筆屋の職方と云ふやうな人が、毎年のやうに花の頃その碑の前に參集して、供物や筆を捧げ、轍を立てゝ、御祭をするにしているのは、如何にも床しい話ではありませんか。例へて申せば淨土宗の方々が宗祖法然上人から溯つて、唐の善導大師などにも鐵仰の念を持たれるのと同じで、た

とひ國籍は違つても「筆祖」と云ふ意味で、
 恬を祀ることは極めて當然でありませう。こ
 の事は日支親善、善隣友好と云ふ方面から見
 ても誠に意義あることで、支那の人にも知つ
 て置いて貰ひ

たいと思つて
 丁度此春四月
 十六日には北
 京から周作人
 錢稻村が來朝
 して居られた
 ので、人を通
 じて參拜を希
 望して置きま
 したが、何分
 にも滞在の日
 數短く遂に參
 拜實現に至らなかつたのは遺憾でありました

人の毛も使ふ
 澤山な穂の種類



筆をその形から分類すると、大筆あり小筆
 あり、水筆あり眞書あり創用筆あり、雀頭筆
 あり、また畫筆には面相筆あり彩色筆あり、
 かし筆あり、また速筆と云つて刷毛のやうな

形に何本も筆を合せたものなどあつて、一口
 には申されませぬが、それらをおしなべて
 「穂」と「軸」この二つの部分から出來上つ
 て居ることは、今更説くまでもありますま

い。
 軸は大概は東洋特産植物たる竹であります
 が、木のもあり、稀には玉、堆朱など高貴な
 裝飾的な材料も使はれて居る例があります。

せば、狸、驢、貂、羊、兔、鹿、馬、狐、猫
 黃鼠、山馬（馴鹿）などの毛で、嘗て横山大
 觀畫伯の奥さんが前髪を切つて畫筆を作らせ
 た例もあるやうに、人間の髪毛を使ふ場合も

しかし軸は穂を保つと
 共に手に握る場合の用
 を便すれば足るわけ
 何と申しても筆に大切
 なのは穂であります。
 穂の原料はいろ／＼種
 類があつても、二三の
 植物性のものを除いて
 他は悉く動物性のも
 の、即ち毛であること
 は子供でも知つて居ま
 せう。それならば何の
 毛が用ひられるかと申

全く無いとは申されませぬが、先づ普通に用ひられるのは狸、羊、兎、猫、それから馬などです。一口に「狸毛」「兎毛」など云つても、毛の生え場所によつて性質が違ひますし、また毛と云へば根元の方が比較的太く、先が段々と細くなつて、針のやうなものばかり思つて居ると、猫の毛は「玉毛」と申して、先から三分一ばかりの所に玉のやうな膨らみがあるなど、意外なこともあります。

勿論、動物の毛でさへあれば何でも筆に作れなくないわけで、馬の毛などは一寸考へると、イヤな氣がしますが、いたゝかな大筆となると馬の尾の長い毛以外に原料がありません。同じ鼯なら鼯でも變り毛となると、なか／＼上等で、兎の毛でも「シモ」と云つて飛毛の如く交つた白い毛を一本々々抜いたものになると、非常に高價なものださうです。兎の髯も稀に大筆に用ひられるさうですが、素人が考へても髯を集めて大筆を作るとなると、相當の兎が要りさうですね。黄鼠と云ふのは斑の尻尾だけを使ふのださうです。

世間では普通の鼠の髯も筆になるやうに思つて居ますが、あれは實は漆師が使ふだけで、薛繪師の使ふ筆としては矢張猫の毛の方が一般に重寶がられると申します。猫の毛は前に申したやうに中途に「玉」があつて、そこが膨らんで居ますから、漆の含み具合が宜しいわけですね。もう一つめづらしい筆としては宇都宮に近い益子の陶器師が使つて居る、瘦せ長い、繪付け用の筆で、これは犬の尻尾の附根の所の長い毛に限ると濱田庄司君が話して居ました。猿、麝香猫、千島の白狸、白

狐など、挙げればまだいくともあります。それならば筆屋さんは毛を何處から仕入れるかと申しますと「毛屋」と云ふ専門の家があつて、飼つて居ます。毛の産地は日本以外支那、朝鮮などで、特に支那からは澤山参ります。同じ鼯の毛でも支那産は長く、日本産は短いと云ふ風で、貂などは近年は襟巻になるので段々と値段が上つて困ると云ふ話でした。日本産と支那産とを較べると、一體に日本産の方が狸などでも毛が柔かい。筆の話

離れて、例へば彫刻に使ふ木材などの話を聞いて見ても、日本産の方がねばりがあつて美しくあると、専門家が申しますが、要するに日本と云ふ國は難有い國で、氣候の穏和な温帯に位地して、水蒸氣が多く、土地に濕りがあり、草木繁茂して、動物なども特殊のいゝところをもつて居るわけであらうと思ひます。(寫眞は藥帖碑拓本)

淨き友 信仰座談會

一、日時 六月八日(第二日曜日)午後六
廿二日(第四日曜日)時より

一、會場 本郷區東片町七八橋本樂榮方
電話小石川四九七六番

一、講題 大乘起信論

講師 中村辨康先生

どなた様も御遠慮なくおいで下さい

淨き友の會幹事



郭公の鳴くころ

吉田 絃 二 郎

今朝の新聞に法然院の萬里小路麟雄師遷化の事が載つてゐた。夢のやうな氣がする。五月三日の夜お亡くなりになつたといふことであるが、わたくしがお目にかゝつたのは去年の五月四日のことであり、恰度一年前のことである。昨年の五月四日は京都の朝は曇つてゐた。

わたくしは朝の中に知恩院に詣で郁芳管長貌下に謁し、細井照道師に伴はれて鹿ヶ谷の法然院を訪うた。知恩院を辭するころから雨になり、鹿ヶ谷にかつたころは大粒の雨が降つてゐた。

わたくしたちは雨に濡れた砂の上を歩いて山門をくゞつた。鮮苔柔かに嫩葉の影も淡く、塵一つないほどに掃きよめられた聖域に竹んだばかりでも自

然に魂の淨められるやうな感に打たれるのであつた。

法然院の軒端に迫つていろいろな椿の花が咲いてゐた。やゝ暗い本堂に入れば二十五菩薩に供へられた椿の花が二十五の花の群を作つて均齊的にかざられてあつたことを、今でもなつかしく思ふ。

奥書院に待つ間もなく萬里小路師が室に入つて來られて、靜かに物語られた。背の高い、やゝ瘦型の品のいゝお方であつた。やがて老い給はゞ瘦驅鶴のごとき聖にもお見えなさるであらうなどとも見ええた。雨に煙る吉田山をへだてゝ衣笠あたりを眺めながら、お話を承つて、やがてお別れしたのであつたが、まる一年後の今日、こんなことにならうとは。



手向けける菩薩の花も散りにけむ

×

釋尊のやうなお方であれば、人の迷ひを悟し給ふことも可能であり、衆生濟度といふことも實質的に期待さるゝことであるが、凡愚の身には人を教化するなどといふことは夢想だもされないことである。人生の深さを知り、人生について思念することの深ければ深いほど自分自身の力の貧しいことを知る。

ちかごろ未知の青年から手紙を貰つた。かれは非常に頭のいゝ青年であるらしい。かつては神童に屬すべき少年であつたらしい。しかも中學一年のころ偶然の出来事からかれの性格裡には抜くべからざる暗鬱な陰翳が織り込まれた。事件といふのはかれが最も親愛してゐた従兄がその友人を刺殺し、従兄自身も自殺をしたことであつた。

友人を殺した従兄は一先づ山中に逃げ込んだ。數日の後山中に従兄の冷たい骸を發見したのはかれ少年であつた。少年は従兄の死骸を抱きかゝへて岩間に安置し、水仙の花を供へて泣いた。

かれはやがて幼年學校に入つた。しかし癒やし

たき人生の苦惱はかれの心を蝕喰みつくしてゐた。かれは中途にして學校を退き、郷里に歸つて來た。かれは今人生に對して懊惱してゐる。この青年を濟ふべき道奈何といふことはわたくし自身の問題であり、同時にすべての人々の問題である。

かやうな實際問題に打つ突かると、人間の力、自分自身の力の弱さをしみじみと感じさせられる。

×

釋尊のやうな偉大なお方にも提婆といふ濟度しがたき衆生があり、キリストにもイスカリオテのユダのやうな救ひがたき男があつたことを考へなければならぬ。このことは、むしろ、わたくしたちに人生についての希望を與へてくれる。いつの時代にも縁なき衆生はある。光明のあるところ必ず陰翳がある。釋尊の大をもつてしても、提婆があつたことを思へばわたくしたちの力の弱さを歎く必要はない。歎かなければならないのは力の弱さでなく、その努力の足りないことである。根氣の足りないことである。

ドストイエフスキイは「愛は努力なり」と教へて



ゐる。涅槃も努力である。濟度も努力である。精進なくして悟りはない。

かく考へて來ると自分の力の弱さにも光明がさして來る。

X

人間は愚鈍なものである。死は眼前のものであることを知つてゐながら、自分のみは死から遠くへだたつた世界に生きてゐるやうな考へ方をしてゐる。しかし一度は忽然として悲しい死に直面しなければならぬ。

自分の死も悲しいが、自分の愛する者の死はさらに悲しい。しかも人間は愛する者の死に直面するまではその悲しみを想像もしない。これが凡夫の境涯である。

わたくしはこの下根の身を悲しむ。けれども同時にこの愚かなる凡愚の境涯をありがたく思ふ。悲しみあることによりて、骨を削るほどの悲しみをあたへらるゝことによりて凡夫はせめてもの菩提心を發する機縁をめぐまれる。

X

また初夏のいろいろな小鳥が武藏野の家の周圍に鳴きはじめた。そして鎮靜みかゝつてゐた痛みをふたゝび掻き立てる。

しかしわたくしは小鳥の聲から自分の耳を塞かうとは思はない。

初夏のやゝ冷たい靜かな微風の吹く日、わたくしはたゞ獨り窓に凭つて郭公を待つてゐる。

このころは一夏に辛つと二度か三度くらゐ郭公を聴くほどに郭公もすくなくなつたが、それでもわたくしは辛抱よく武藏野の郭公を待つてゐる。初夏の郭公の聲はわたくしの心に麻痺しかけてゐる悲しみを眼ざめさせてくれる。悲しみに生きる者はさらに深き悲しみに住することによつて魂を淨めらるる。

やがて睡蓮の花が咲くであらう。

やがて草芙蓉の花が咲くであらう。

やがて鼓子花の花が咲くであらう。

その一つ一つの花の上によみがへつて來る思ひ出に、胸を痛めつゝも、生くる者のありがたさを思ふ。

歌壇

典謝野晶子選

北海道 中村 茂 舞

一すぢの道をのこして何處までも
黄にかがよへる菜の花ざかり

評

一望無限、ゆさむるばかり美しい蕨の花畑春の日がうららかにその上を覆して、眺むる作者の心もうつとりとなつたことであらう。

京都市 望月 久次郎

塚深く櫻吹雪す時は午眼をとちて
昔偲ばゆ

評

古人の名ある人の塚のほとりに佇んで古へを思つてゐると折からの風に山ざくらが吹雪のやうに塚の上にも佇む人の上にもふり注いだ寂しくも美しい景である。

小樽市 中村 もん

沖で漕ぐ大漁鯨のうた聲につれて
うたひぬ濱の群衆

評

實のある賑かな北海の春景色である。鯨の大漁を祝ふ濱と沖との交歓が面白。

京都市 黒野 智 善

あなさびし、あな目覺しや、宇治
川のはとりに間なく散る櫻ばな

和歌山縣 萩野 一雄

色あせし妻子の墓標にぬかつけば

そぞろ溢るるわが涙かな
(三年ぶりに外泊を許され出征中死亡の妻子供の墓参をす)

高知縣 竹島 渡波 爾

うつろなる夜の局舎に算盤を弾く
音せり寝ねがたきかも

高知縣 丸岡 長 壽

まむかへる岬の鼻や白々と波の寄
りつつ島はけぶれ

朝鮮 武内 竹 美

酸素吸入も輸血も效果あらはれず
そつと抱きて吾子を凝視むる

朝鮮 武内 定 賢

戦時下にこの子死なしてなるもの
か祈りつつ看る吾と妻かも

大分縣 井澤 文 江

罪ふかき女の身にて救はるる他力
の教へに逢ふぞ嬉しき

中支派遣軍林隊隊 湯原 弘 道

大君に盡すまことをそのままた
らちね人に任ふうれしき

青森縣 成田 光 雄

櫻ばな身に浴びながら思へらくな

どか空しくわれ世に生きん

北海道 寺田 順 山

松風はまた寒むけれど谷川に春を
語らふ水の音かな

大分縣 敷 正 喜

死といふをただに怖しと恐れつつ
悶え悶えし身の愚かしき

東京 梓 範 子

國のためは大君のおんためにま
ことの道に生さんとぞ思ふ

名古屋 市 江崎 孝 昭

うぐひすの初音をききてこの年の
春ちかづくときとときめく

北海道 花田 順 往

うつし世にかく生きらるる身とな
るも衆生無邊の恩と知るなれ

京都市 福島 孝 治 郎

子を思ふ母の心の燃ゆるらしひね
もす吾の宅を訪はれぬ

名古屋 鷺 津 耕 順

咲きそめし櫻をきりてみ佛に先づ
供へけり淨き一とき

北海道 平 井 正 念

かすみつつ春の來にけり職場より
眺むる花ぞゆかしかりける

東京 小 泉 妙 春

あをあををと麥の穂先の輝きてみ國
の幸を負ふけはひする

大阪府 笠 井 松 枝

笙の音に二千の人のしづまりて五
十六世を繼ぐ僧をがむ

丹波 高室 榮 齋

裸にて生れとし身は裸にて往くを
佛の法とこそ知れ

名古屋 市 江崎 幸 ぬ

なつかしきみのりの庭の月影はい
つの世にかは替みまつらん

茨城縣 伊 藤 是 る

いづこにて競ひ釣りする人ならん
あまた越えゆく曙の里

青森縣 丸 尾 傳 山

神の道佛の道も一とすぢに國の榮
えを祈るなりけり

静岡縣 一 向 山 人

みすずかる信濃の國の善光寺人等
まあると今朝を出で立つ

福島縣 古 川 喜 作

おくれ咲く水仙の花五月なりその
口紅の赤きさびしき

栃木縣 大 輪 清

吹く風の力に乗りて己れより羽搏
とむる花畑の蝶

はがきは一回二首以内とし
「淨土」編輯歌壇係あてに
送ること。

投稿規定

はがきは一回二首以内とし
「淨土」編輯歌壇係あてに
送ること。



説小
幸

福

一瀬 直 行

は、もう床の中に眼をさまして、末の吉太郎と四男の善太郎が、互につき合つてはふざけてゐた。路地口が薄明るく、浮き出した敷石を踏んで、新配達夫が入つて来て、又出ていつた。

權太はよい子もちだつた。男兄弟が五人、揃ひも揃つてすくすくと育つてゐた。毎朝ねむいところを起されるが狭い部屋の中を一緒

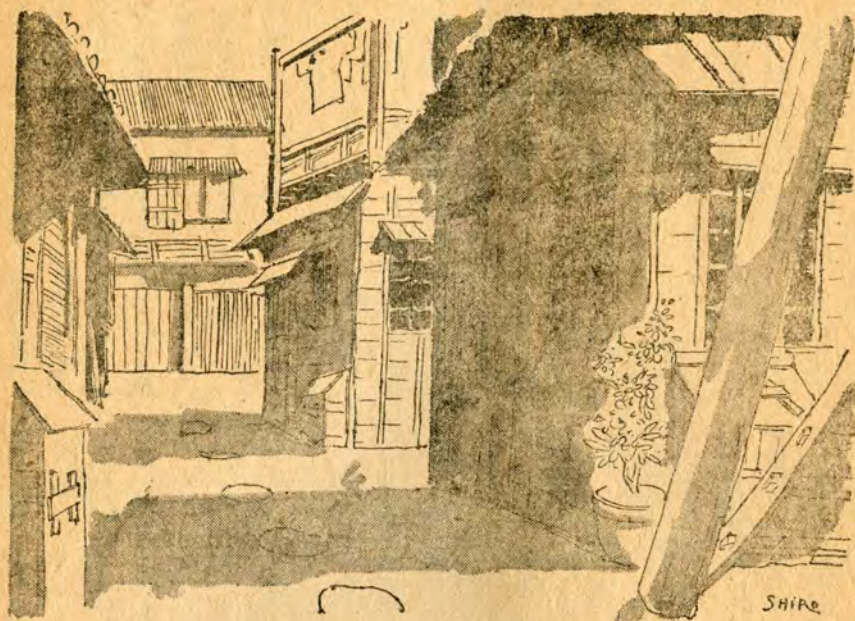
路地に二階がりの左官屋の佐吉がかつてゐる雄どりが、先づときをつくると、屋根を越えた神社の銀杏に小雀が囀りだした。佐吉の雄どりは二階の狭い出窓の小さな箱の中にかつてあり、土を踏んだことがないせいにか、妙に弱い細い聲で鳴き、この頃では、町中の社の雀もめつくり数が減つた。と、その頃、階下の一間に押し合つて寝てゐる權太の子供達

になつて彼等とところともみ合ふのは、わけても楽しかつた。これまでは至つて朝の機嫌の悪い彼が、女房のおつねとは反對に、日ましによくゐた。一人づつ頭をはたいてみても大き過ぎに五つ、可愛さに撫でゝやる代

りに頭をはたく、これが彼の子供の愛し方であつても頭でつかちの一同を叩いてみてからさて五年十年とたつた時のことを、いやもうせめて二三年もたてば、五人が五人それぞれに成長して、いづれおとらぬ一本立ち、毎朝の夢であつたが、直ぐ先きに見えるやうな気がし、一人胸をふくらませてゐると、

「おまへらくらい運のいゝ奴はない」とうらやまれた同僚の言葉が、改めて思ひ浮ぶ。權太五十年の生涯にかけて、これ以上の幸福はない。又自慢の一つでもあつた。

早くも旺盛な朝の食事をととのへたおつねは、先きを争つて顔を洗ふ一同の面倒をみ、



口きたなく叱りと
ばした。側から見
かねたやうに權太
は、

「さうがみがみ云

つたつて仕方がな
い。子供はしたい
やうにさせておけ
ばよいのだ」とま
つ先きに騒ぎに加
はつた。やがて小
さな膳の周圍に膝
をつき合はせて、
一同は箸をとつ
た。米が配給制に
なつてからは、育
つさかりの一家に
あつて、どうして
もたらない。そこ
をおつねは何とか
ごまかしごまかし

その日その日をやつと間に合はせてゐた。そ
れでも日によつてはたらない。親も子もよく
喰つた。一面よく働き、よく遊び、よく寝て
然もよく喰つた。一家の健康がもりもりと育
つていつた。

大抵朝の食事は普通にしてゐたらたらない
ので、米を少しにし汁をうんとつくつて、そ
れに野菜のきれつばしをまぜて、ぐたぐたに
煮た大鍋を一家はかこむ。子供達は幾杯もか
はりをし、大皿に盛つた澤庵をぼりぼり喰つ
た。ぐづぐづしてゐたら喰はれてしまふので
誰も無駄口一つきかずに、せかせかと食ひ喰
つた。家族七人がすさまじい朝食を終ると、
膳の上には飯つぶ一つこぼれてはゐない。き
れいになめたやうに、一同がたいらげてしま
ふが、さてくちくなつたやうな、ならないや
うな、妙に腹の中だけがだぶついて、それで
も不平一つ云ふものもない。

やがて働きに出る權太と長男の長吉が門口
を出てゆき、續いてあとから學校へ通ふ次男
三男、四男と家を出て行く。まるで嵐のすぎ

たあとのやうにとりちらかつた中に、おつねと末の吉太郎だけが残る。おつねは朝の掃除をすませ、その日の洗濯を終ると、一日中壁に向つて坐つた儘内職の手を運ぶ。いくら稼いでも稼きたらない。さうして彼女はぶつくと日のくれるまで働いて、働きぬく。

一と頃から見ると、權太の一家はたしかに明るくなつたやうだ。こゝ四五年来のことである。それまでは家の中がいやにじめつていて權太はふてくさるし、おつねはヒステリーをおこし、何より貧乏を嘆いたあげくは、どこへもつてゆきどころのないいらしたいかりを家の内で破壊させてゐた。今日とて貧しいことに變りはないが、それでも尙、ときどき突拍子もない笑聲がもれるし、何より大きくなつた子供達が一日中にぎやかに騒ぎ廻つてゐる。これまでなら、かうしたさまにも、たまりかねて權太は腹を立てたかもしれない。それが何がなし子供等と一緒に、小ごとを云ふどころか、にやにやして見送つてゐるし、おつねはおつねで、大體生れながら無

愛想な女であるが、それにこれまでの亭主にも、世間にもつてゆきどころのないもやもやした氣持を、子供にあたつてまぎらしてゐたのが、權太のうは付いた調子につり込まれてか、今までの陰氣な顔もみせず、くらしや子供のことに浮き足立つて追はれてゐた。それにしてもこの變りやうは、一體どうしたわけからであらう。

變つたと云へば、この路地口にしてからがめつきり最近では變つていつた。よく權太がぼんやり窓口によりかゝつてゐる時など、いづれもお互に十年二十年と朝夕顔をつき合はせ、よいにつけ悪いにつけ力となり合つて來た隣近所の人達が通るのを見て「畜生ッ、あすここの頃は馬鹿にくなりやがつた」といまいましさに呟く。全く、これまではその日に追はれて、どうにもくらしの立たなかつた連中が、何かしら各自道は違ふが、ひどく羽ぶりがよくなつた。さあつと景氣の波がこの路地にも吹き抜け、ぐつとくらしが樂になつた。わけてもいままでなら、ごくつぶし

として餘計なものあつかひされてゐた子供の多し程、羽ぶりがよい。つい昨日までは涙をたらしめてゐた子が、少年工としてこれまでの大人もかなはない稼ぎをとる。さう云へば、ある會社に小使として二十年勤続の榮譽を擔ぶ權太より、つい去年小學校を終へたばかりの長男の長吉が、つとめてから一年そこそこの今日、父子の間でおつつかつつの稼ぎをとつてゐる。權太には馬鹿げた話に思へる。が、それはそれとして、こゝしがない連中の間では、今まで靴屋の職人だつたとか、屑拾ひだつたとか、どつちみ一とばち世間のおがめな者程、今日では鼻息が荒い。中にはつい昨日までのことを忘れて、喜びも悲しみも共にし、同じ水道で飯をたいて來、同じ土地にしみ付いて來た間柄なのに、一番古い權太を尻目に「いつまでまごまごしてゐるんだ」と蔑視の眼も露骨に路地を引き上げて行く。と彼は何とも云へず、たよくやしい。

「今にみる。このおれにたとへ働きがなくなると、やがて世間に減多にない揃ひも揃つて男

はかし五人の子が、それぞれ立派に成長したら、その時こそやつらの面が見てやりたい」と、くやしきのあまりに叫ぶ。と、いつかさ

うした感情も消えて、今度は逆に身のふるへる程、遠い先きのことが、

つい近くに現實として眼

に浮び、大きな希望にふ

るひ立つ。まだまだ今日

小さいが、すべてはこれ

からだ、さうした夢が

寝てもさめても脳裡から

はなれないで、つい日ご

とに嬉しさは増して、一

人踊り出すのだつた。

が、おつねはまだ擱んで

もみない夢に、そこまで

有頂天にはなれないが、そんなものか

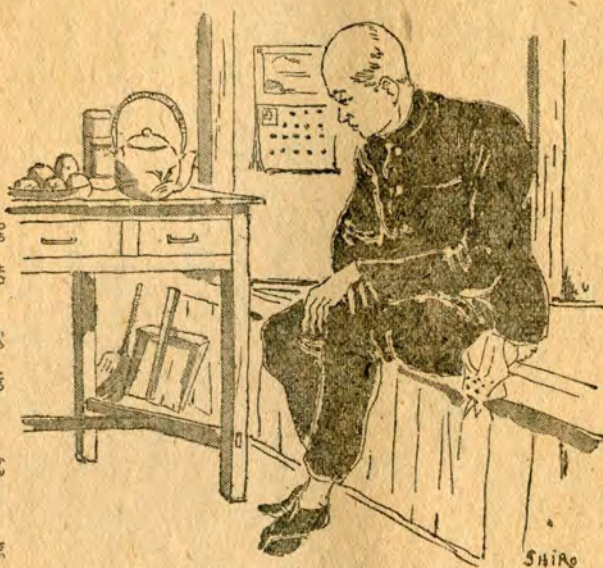
と、はしやぎ廻る夫の傍に日頃のしぶい顔を

無理にも笑つてみせてゐた。

權太は周囲が山にかこまれた農家の次男に

生れた。畑の中から掘り出された芋のやうな男、と云つて、それ程人垢によごれてゐないかと云ふと、むしろその反對、たゞことな

Shire



く土に汚れた芋を轉がした感じ、十歳の時東京へ出て來、でつち奉公をしながら他人の手で、現在の小使になるまでは、日本橋の間屋

の小僧とか、蕎麥屋の出前もちとかをして渡り歩いた。一人前になるまでは故郷の土を踏まない。さうした幼い頃の考へが今日もあつて、そのうちには何とか身の恰好をつけてといつか五十の坂を越してしまつた。そのため親の死目にも會はない。二人兄弟の兄は國で百姓をし、減多に音信がなかつた。

彼はものごとに辛抱強いが、又頑固であつた。間違つてゐても、決して自分が悪いとは思はない。そのかたくなさが世の中に通つたものと、世間をも人をも甘くみるが、結構笑はれる種となつた。彼には冗談もきかないし、ましてきのきいた皮肉も通じない。

おつねと一緒になると、初めてこの町のこの路地に新世帯を持つた。それから今日まで約三十年近く、一日として忘れたことのない一事は、少しも早くこんなしみつたれた路地裏の生活から逃れて、明るい日のもとに明るく生活がしてみたいと、寝てもさめてもかたく胸中にきざまれてきた。今日でも尙、さうしたことがあきらめられずに、いつかは出て

みせると、かうしてゐる間にも、仰天するやうな幸運が舞ひ込んで来るかもしれないと、あてのないあてを心待ちに待つてゐた。さうした長い間の土地のうつり變りによつて生れる云はふ時の變化にも、當人は意識しないながらも、染まつていつて、大きな時代の波に結構をどらされてゐた。中でも大水や震災のやうな過去の町の出来ごととは兎も角として、その頃から土地にしみ付いてしまつたやうな不景氣のどん底に喘いでゐたこの町のこの路地にも、時の流れは押しよせて來て、ある時近所に住む何をして喰つてゐるのか、性の知れない青年と彼はしたしくなり、日頃青年の說いてきかすことにすつかり惚れ込んで、それも性根は貧乏から逃れたいばかりからのことであるが、一人でむやみと力みかへつた。そして一つそなへておいたらと青年からすゝめられる儘、なけなしの財布の底をはたいて一同の仲間入りをし、ろくすつぽ字も讀めない權太が、全部で七巻もある思想の本を買ひ込んだ。さて手にしてみたものの、細かい活

字がぎつしりつまつてをどつてゐるばかりし、どこからどう眺めてみてもさつぱりわけがわからない。それでも彼は満足だつた。それを抱へてゐるだけで一同と共に力強く歩む思ひ。いづれにしても權太と思想の本とのとり組はまことに妙である。これも己の力のたんなさを思はぬ、又人からおくれをとるまいとする、それに少々見えも手傳つて、はた目からは珍妙なことに終るのだが、當人は至つて眞顔であつた。

如何にうぬぼれが強い彼でも、こればかりはあきらめるより仕方ないこと、それは丈の低いこと、全くもつて生れながらの小男であつた。だからどこへいつてもチビの權太で通る。普通ならそれが愛嬌にもなつて人からも愛される筈だが、彼の場合にはその底にくしみをもつてみられる。一人前の柄もないくせに、奴は妙にうぬぼれが強いとさげすまれた。小さいと云へばまことに小さく、電車に乗つても吊皮に手とよかない。郵便物をポストに投げ込むのにも、やつと丈のびをし

て入れる。自轉車にのつても、ペダルに足がとよかなく、尻を左右にふつて調子をとるがら走る。それでゐて、彼は人なかに出たが。何かとしやしやり出て大きな口をきく。が、これだけは彼も縁のないものとしてあきらめ、女からは遠ざかつてゐた。

それが彼の二十八の時、おつねと結婚した。これを知つた世間では、この道ばかりはわからないと、あきれたやうに二人を眺めた。もつともおつねが彼と一緒にゐるまでには、いろいろとわけあひがあつた。そのうちでもなかに立つた人、つまり權太にはたつた一人の東京での親戚にあたる叔父が口をきいて、その頃家で下働きをしてゐたおつねに因果を含め、無理にも納得させてしまつた。それには、これまでに權太が十歳の時から喰ふものを喰はないでためた金がつもりつても四百圓程、それを叔父のうまい口車と高利の餌につられて、長いことかしてあつた。勿論かへす腹のない叔父は、その代償としておつねの世話をした。大體權太は吝嗇である。自

分のやうに醜い生れの者にとつては、尙のことと金が味方であると考へ、どうやら少しまとまつたところを、そくに叔父の手にもつてゆかれ、今日でももどるものと彼は考へてゐる。さて話がまとまつてかたばかりの式を上

つたことにはおつねと云ふ女が、これは又、權太と逆に至つて大女。よくふとつて丈も並はづれて大きい。どこまでもがつしりした骨組に出来てゐた。二人の間はよいとも悪いともつかないが、兎も角五人まで子をした今日、特に夫婦仲が悪いとも云へない。が、平常どうもうまく



Shin.

つねが大きく
眼の前をふさ
げて先きが見
えなかつた。
と、急にはづ
かしいやう
な、嬉しいや
うな、妙にひ
きつゝた笑顔
をみせたが、
こんな表情は
彼の一生を通
じて二度とみ
られない。困

——たしかに事變後、特にこゝ二三年來一
家の中は明るくなつた。今まで幾度となくだ
まされて來たところの、これからはよくなる
と云ふことが、いよいよ本當に實現してゆく
やうな氣が、彼にはした。かなり手前勝手
な考へではあるが、自分達の生活もよくな
る。一家の幸福とはこのことをおいて他には
絶對にないのだ。至つて簡單なことにとれる
が、權太にはせい一ぱいのたゝかひであつ
た。物價はあがつて種々日増しにくらしにく

くなるが、子供の將來のことを思へば、底なしに希望はのびてのびてひろがるのだつた。そのうちには一人位眼の玉をむく程出世するかもしれないのだ。さう思ふだけでも今までのじめじめした家の空氣は消え去る。兎も角一つの生氣が不思議とみなぎつていつた。

この頃では、ちよつとしたこと、たとへば長男の長吉が月給日の歸りには家に土産物を買つて来る。と、それを圍んで家族は喜ぶ。わけても權太は相好を崩して迎へる。

まだ學校へ行つてゐる弟達の間にも世間の風は吹いて、たとへばどこでも手のないところから、彼等は調法がられた。近所の使ひをしては駄賃をもらふ。店番をしてやつては小遣をもらふ。自警の當番の代理をつとめてやつては小錢を握ると云ふ風に、それに一同はなかなかの達者揃ひであつた。さうしたことを親に知られては具合が悪いと思ひ、かげに廻つて立ち廻つた。權太は自分がさうであつたから、せめて子供達だけにはさもし思ひをさせたくはないと、かなり金錢には口やかましい代りに、何はさておいても彼等の云

ふことはききとゞけてやつてゐた。

花見時もすぎて氣候がよくなると、月に一度か二度の休みに一家は揃つてこれも流行のハイキングに出かける。と云つても、つい近くのせいぜい荒川の土手あたりへ行つて、一日草原に遊ぶのだが、一家にはよい行樂であつた。おつねは握り飯を辨當につめ、子供達は肩から水筒をかけ、先づ先き立ちになつて權太は近所に留守中をたのみ路地を出て行く。乗りのものには乗らないで歩く。千佳大橋を渡つて、土手にかゝれば、五人の子が互に肩を組んで先きを行く。あとからこんぼすの短い彼は汗を拭き拭き追ふ。これもふとつて歩きにくいおつねが埃を浴びて歩く。と、又思ひ出したやうにかけ出しては一同の先頭を行き、得意の面もちが、それをあとから見送る子供達には、彼等だけの苦の種があつた。と云ふのは、その時の父のいでたちが、かつて長吉が近所からおさがりをもらつた學生服が丁度體に合つて着込み、大きな靴をひきぎつてゆく情ない姿、日頃からからかはれたり、馬鹿にされたりして肩身の狭い思ひを

してゐるが、今更にそれとこれとを思ひ合はす、期せずして一同が呟いたところによると「うちのおやぢはもうあれで育たないのかしらん」と眞剣な顔付、流石に長吉だけは、「何を云つてゐるんだい。きまつてゐらん」と云つたもの何となく淋しさうな聲音だつたやがて曲り角から川べりへ子供達は一せいにかけ下りていつた。あとから追ひかけるやうに走つた彼は、その時何かにつまづいて、前へのめつた。どうしたのか、その儘起きあ

がれないのであるで、おつねは走りよつて手をとつてやつた。見れば鼻の頭が赤くすりむけてゐた。と、急に彼はおつねの手をふりはらひ、「子供は神さまだ」と頓狂に叫び、兩手をかざしながらあとを追ひつづつ「さあ、元氣に遊ぶんだ」と一同へ大聲を出した。

空には一片の雲もない、河の面はきらきらと輝く、あつちとつちに行樂の人々が賑やつてゐた。それつきりどこにも權太の姿は見えなくなつた。と、くさむらから現はれた彼は川べりの一同にやつと追ひ付いてゐた。

俳壇

太田馬子



今治市 三木光子

何をしてゐる子達やら泣うらら

多少睡れてゐるのを何をしてゐるのかわからないが、其の鬱鬱にうらなるものを感じたのであらう。表現も面白う。

静岡縣笠井町 水野法子

蜘蛛の巣に搦めとられし蠅と立く

中七字までは、ひどく平凡で、下五字が如何にも、わざとらしいやうであるが、毒と迫るものを感じる。眞實から来る力ならん。

新瀉州 北出 皓月

春雨に濡れて悔なき子の遊び

細い線のような春雨の中で一心に遊んでゐる子供等を見ての作であらう。悔ひなきは此の場の空氣を遺憾なく傳へてゐる。

大分縣 石堂柑山生

吾もまた刷書の蝶に祝ふかな

岩國市 長岡 白朝

追はれ来て大蚤我に飛び込みし

東京市 松岡 成泰

春日浴びてひそかに熱を怖れけり

小樽 平井正念

雪解けをまろびたる手のやりごと

和歌山縣 荻野 兎月峯

いたつきの深山の庭に春惜む

長崎市 池田 春枝

我病みて我を識りけり梅の花

山梨縣 杉本 伊子

梅雨の窓暮れ煙草の火の赤く

堺市 笠井 松枝

芽柳や寺縁のぎほしふれやすく

小樽市 中村 茂舞

どこまでも黄にかざよへる花菜畑

京都市 福島孝治郎

排氣筒ゆるく廻り春日和

東京 渡邊 一念

花の塵池の金魚の戯れて

大阪 西村 辰蔵

打水の香も街の夏めきぬ

栃木馬山町 大輪 清

春連の光りにうづく目なりけり

同

白き蝶に茄の花はみな黄色なる

滋賀縣 重野 ふみ子

隣りの子甘茶もらひに來りしよ

津和野 田中 秋芳

おどり出づる泥鰌に春の田溝かな

川島市 深瀬 益吉

いち早く咲きたる鉢の山櫻

大阪市 高橋 いし

芽をふさし木々がいとしや春の雪

東京市 渡邊 一念

春霞工場の煙まつづくに

北海道 阿彌 陀寺

夕立の雲の驕りや鳴る光る

大阪 田中 秋芳

金魚の水かへし子に明るくて

青森縣 丸尾 傳山

無我に入ることのありけり花祭

島根縣 大村 轉石

濱蟹の穴掘る子等に暮れ遅し

同 大村 かよ子

入學の一きわ高き吾子かな

島根縣 神一 倫道

子も親もうれしいそがし雛まつり

員塚町 日根野 谷 施里

桃の花は朗らかに照りて兵歸る

島根縣 西住 いほり

春の空鳥の輪大きく晝さゐる

青森縣 成田 光徳

土の香を身に嗅ぎながら春の路

東京 無名 草

山吹の庵静かな清水かな

大分縣 正喜

此の島に大きくかゝり春の船

山梨縣 小林 吉五郎

塚の文字臆にさみし夜鳴鳥

土佐 横山 亮園

今日もまた空のしめりて春の雨

山梨縣 原 一幸

稱名の聲ばかり寺の土用十

投稿規定

官製はがき一回二句以内
とし「淨土」編輯部併座係
あてに送ること。

投句のお願い

歌城、俳城、柳城、會員通信
とも御投句の一切は前々月末日
でありますので、原稿はなるべく早
くお送り下さい。

○笑話、小噺で採用のものには
薄謝を呈します。

○信仰相談のお質問は頁數に制
限があり、掲載の遅れることがあ
りますので御諒承下さい。



俗人俗の記

子母澤寛

一、小離れの雨

まだ櫻が一ぱいであつた。それが夜明けに一雨あつた朝でことの外うつくしい。私は早朝の汽車で、窓からこの櫻を見ながら甲州へ向つてゐた。甲州の代議士堀内良平翁とたゞ二人で、今日一日をゆつくり黒駒村の武藤家の古い土蔵の中を見せていたゞころといふのである。

武藤家へ着いた頃は、また空が雨もよひになつてゐた。そのどつしりと重くなつた中で鶴鶴がいゝ聲で頻りに鳴いてゐる。如何にものびのびと、思ひ切つて鳴いてゐる聲が堪らない程心をときめかせる。私は小鳥が好きで、實はいろ／＼飼ひもしてゐる。鶴鶴も、黒も黄も、俗に紅鶴といふものも飼つた事がある。この鳥は元來が、よく人にな

つくし、人の言葉もある程度はわかるようである。が、やつぱり鳥といふものは籠で飼つては駄目だ、その鳴聲がまるで野や山の時のものとは違つて終ふような氣がする。周囲の環境といふことばかりではなくどうも變つて終ふ。考へて見ると變つて終ふのが本當かも知れないが私はこゝでできた鶴鶴と、その前、駿河の大宮の奥の大石寺といふお寺へ詣つた時にきいた鶴鶴ほど、心をゆるがしたものは無かつた。

神座山が雨雲を裾にすう一つと聳え立つてゐる。武藤家は代々この神座山の神主の家である。明治の初年迄は屋敷も二町四方に及び、三里四方のお山はその御朱印の社領として材木その他の諸収入は全部武藤家のものであつた。今残つてゐる武藤家は、母屋は元より悉くが取こわされたその全盛の頃の小離れで、小さな一つの座敷を中心に、茶の室と、次の間と、新しくつけ足した臺所と、それだけのところに、武藤家の血をひいた七十幾つとおばアさんが、たつた一人暮してゐるのである。

この家の縁から下が、だら／＼下りになつて、桑の畑につゞいてゐるが、その邊一面は昔は武藤家の庭であつたところである。高き十尺位の松がある、幾年も手を入

れないのでひどくなつてゐるが、枝ぶりも、幹の構へも變つてゐる。むかし北條家から武田家へ嫁さんが來た、その時、この武藤家で嫁さんが休憩されたがその記念にと、盆栽の松を一鉢下さつたのを、地へ下ろして今日に及んだものだといふことだ。如何にもその話を信じられるような松の姿である。

そこから少し離れて、その土蔵がある。窓の扉の壁がぼろ／＼に落ちて、薬が下つてゐるし、金具も眞つかに錆びてゐる。私はこの土蔵の中から、實は探し出したものがあつた。

維新前の武藤家は、詰りはこの邊の豪族である。神主として學問があつたといふばかりではなく、富豪として響き渡つてゐた。だから、諸國のいろ／＼な有志が、この家をたづねて來て、或は助力を仰ぎ、無心をし、或はその邸内に追手のきびしいからだを隠したりしてゐた。殊に、邸内の片隅の深い竹藪の中には、いつも大きなばくちが出來てゐた。神社領で、石和の代官所邊りの力では手の入れようもなかつたし、殊には勢力家の屋敷内。それに幕末の武藤家の當主外記といふ人は剛腹大膽なところがあつて、誰かこの竹藪の拜借を願出ると、勝

手にしろ、が、弱いものをいぢめたら承知しないぞと、
 こういふ位のものであつたから、こゝなら安心してばく
 ちなどもやれたのであらう。

やくざ者の多いのでは名代の甲州である。近くの竹居
 には吃安がゐたし、甲府には祐天仙之助、この黒駒には
 勝藏がゐた。その他、近郷近在を闊歩した所謂無職渡世
 は數を知らない。だから、代官所の下役などでも、こ
 ういふ暴れ者を御用にする前には、一應武藤氏の耳に入れ
 て諒解を得る位の必要があつたやうである。

吃安が犬上軍治といふ自分の飼犬に手をかまれて捕へ
 られたのは、この武藤外記の碁の相手に出てゐて夜更け
 ての戻り道に、すぐこの近くでやられた。黒駒勝藏が京
 へ上つて四條隆壽卿の家來となり御親衛隊長として勤王
 の働らきをするようになったのも、この武藤さんに説か
 れての事らしいのである。尤も、武藤家には、志士が絶
 えず潜んでゐたから、その誰かど、勝藏を説いたのかも
 知れない。堀内良平翁は、天誅組一件で戦死をした那須
 信吾のようだと主張してゐるが、或は、そうかも知れな
 い。

一、黒駒勝藏

そこで、私のこの土藏を見せて貰ひたかつたのは、一
 體、勝藏は、何年頃に上洛したのだらうか、それがはつ
 きりすると、勝藏へ勤王を鼓吹したのが誰であるかもほ
 ゞ見當がつく状態になつてゐる。勝藏はきつと上洛の時
 に、武藤家へ暇乞に來てゐるだらうし、來なければ來な
 いで、とにかくその勝藏の上洛がわかるような、なにか
 であるに相違ない。何にか文書が一通でもあれば、堀内
 翁の那須説の證據も上るし、勝藏の行動よりは、那須氏
 が甲州まで來てゐたといふ多少とも義舉に關係のある話
 題にもなるから、この文書を見つけたのが第一。

尤もこれには少し譯がある。早い頃だが、堀内翁は、
 一度、この土藏の中の書類を人に頼んで、多少取出して
 貰つた。これは私も拜見したが、その中に外記さんのく
 わしい日誌があつて、それに、勝藏が京にゐて丁度、勤
 王方の甲州入について道案内御先導を申したいといふこ
 とで上洛した外記さん達と逢つた事が書いてある。この
 時はすでに小宮山勝藏と名乗つて立派な四條家の家來。

だから、この日記の年代をもう三四年も先きへ行つた分を見たら、勝藏の上落がわかるのではないかといふのでそれを求めたのである。

土藏の二階は薄暗い。昔は寶物が山のように積まれてゐたといふが、今は、薙刀、槍、その他、多少の什器の外、大したものはなく、たゞ古い書類が幾箱かあるのである。

古い一通一通を、小さな土藏の窓際へ持つて來ては讀んでゐる。鵲鴒がいつそう鳴いてゐる。

とうとう雨になつて來た。雨の中に、畑が見え、藪が見え、山々が見え、その山や、藪の間に、櫻が、あつちにも、こつちにも咲いてゐる。

が、残念乍ら、外記さんの日記は、勝藏と逢つた上落以前のものは、ぐつと離れて安政に行つてゐて、どういふ譯か、私が見たいと思ふ文久か元治邊りのものは無いのである。土藏も、武藤家が没落につれて、幾度となく開かれ、幾度となく賣立てられてゐるから、その時分に布古扱ひをされて終つたものらしいのである。この二十年位は賣立てるにその品物が無くなつてゐるので開けなかつたが、その前にすでに失はれたものであらう。

しかし、私は、外にもう一つこの土藏の中に求めてゐたものがある。それはかねて、小澤一仙齋といふものゝ彫刻した煙草盆と手埴火鉢が、この土藏にあるといふ事をきいてゐたのである。勝藏については得るところが無かつた。が、この二品は、箱の中に藏されてゐるのをすぐに發見出來た。

一仙齋といふのは、伊豆の男である。ひどく彫刻に巧みで、父は宮大工、舎弟も彫刻は名人の稱があつたときいてゐる。その一仙齋の彫刻は神座山の神社にもあるといふし、黒駒の何んとかいふ時宗のお寺にもあつた。これは私も見た事がある。うまいものだと思つた。この一仙齋が勅使の僞先觸れをやつたのである。來もしない勅使が甲州へ來るといつて、自分はその先導役と云ひふらし立派な僞書をこしらへて、大勢の家來をつれて、各方面の富豪を説いて獻金をさせて廻つた。

それが止せばいいのに、物の勢ひで、黒駒村まで乗込んで來た。これを見ると村民たちはやアあの馬で來るのは一仙齋だといふ譯で、その騒ぎが大きくなり遂に捕へられて、甲府で首を斬られて終つた。しかし、この一仙齋が、果して悪意だけの僞先觸れであつたかどうか、

私はそこには尙ほ多少の疑ひがあると見てゐる。

この一仙齋も、長い事、武藤家の世話になつてゐる。話では、妻を伊豆から呼んで武藤さんの世話で、いろいろな彫刻をやつて、黒駒で生活してゐたといふことである。

この一仙齋の日記は、私は前年見てゐる。字も相當に書くし、一と頃江戸にゐて、いろ／＼な志士との往來もつかはれる。それがどういふ手藝で黒駒へ来たかはわからないが、恐らくは父の宮大工の關係でこの男も武藤家へ出入の一人となつたのであらう。

三、一仙齋の墓

その一仙齋の彫刻だと、この土藏に秘藏されてゐる品は、如何にも見事な出来である。こうした彫刻などに見識のない私ではあるが、何にかしらその彫刻が生きてゐるのを感じた。が、段々見てゐる中に、私は思はず、これはいけませんやと云つたのである。一仙齋々と秘藏したそれが一仙齋ではなかつたのである。福田俊信成寅夏刀と銘があつた。明治十一年の作だ。一仙齋は元年に

斬られてゐる。これでは話にならぬので、堀内翁も私もがつかりした。

しかし、武藤家のおばアさんの話によつて、福田は一仙齋の舎弟で、兄の死後もすつと黒駒にゐて彫刻をやつてゐたといふ事をきいて、成程と思つた。地方にはよくこんな事がある。いろ／＼な噂だけで、實物はひどく話らないものが多いがそれかと云つて餘り當めてかゝれないものも時にはあるのである。土藏の中は昏くなつて終つた。もう見るものも無い。外へ出る。雨はいよくはげしくなつたが、この雨の土砂ぶりの中で、まだ鵲鴒が鳴いてゐるのである。

首を斬られた一仙齋の墓が武藤家の墓の中に交つてゐる。竹籤があつてその前に、二十ばかりの墓が並んでゐる。みんな古くなつて苔むしてゐる。まだ百年とは経たない外記さんの墓でさへもう文字は讀めなくなつてゐる。幾百年も幾千年も残そうために心をこめて建てた墓も、思へば果敢ないような氣がしてならない。

一仙齋の墓は、明治二十年頃に出来たものであるが、これさへ、水をくんで来て、たわしでごし／＼洗つて、やつと、それとはつきりした。誰やらと二人の名を並べ

て彫んであるが、たゞ名前を書き放しで、墓とも位とも
ほつてない。刑死人だといふので、遠慮をしたのかも知
れない。

私は雨の中に、暫くこの墓の前を立去り兼ねた。一仙
齋の文書の中に、恐らくは彼れの絶筆だらうと思はれる
歌を見て記憶してゐるそれが、まさしくと眼の前へ浮ん
で來てならなかつたからだ。僞お先觸一仙齋は

「おしからぬ命なれどもおしかりきつくす心のあたとな
りせば」「國のため君のためのみおもふよりかねてぞす
つる命なりけり」と牢内で詠んでゐる。最後まで、世間
を僞つて死んだものか。私はそう冷めたくばかりは考へ
てやりたくなかつた。

私は堀内翁へいつた。どうです、ぬれ序手ですから、
勝藏の墓へも詣つて参りませうか。堀内翁は、そうか、

陸海軍慰問雜誌淨土

寄附者芳名(略敬稱)

一圓二十錢	大分縣佐伯町	佐藤 初枝
二圓四十錢	京都府綴喜郡普賢寺村	深尾 乘賢
一圓二十錢	同	山本 倉造
一圓二十錢	樺太泊居町	三綠寺參詣人
一圓二十錢	同	阿部サダ子
三十圓	新京市祝町二丁目	田中 卓二
一圓	朝鮮平北道古邑	倉持 平次
一圓二十錢	鳥根縣濱田町朝日町	松岡熊太郎

二圓	京都市中新道佛光寺	中村鶴之助
一圓二十錢	茨城縣多賀郡華川村	川波舜民
二圓四十錢	滋賀縣甲賀郡伴谷村	安居快音
一圓二十錢	蒲田區女塚	欣 淨 寺
五圓	平市九品寺前	遠藤 心光
八十錢	大阪府貝塚町	日根野谷記三弘
五圓	函館市船見町穆名寺教	竹内千代子
八十錢	滋賀縣甲賀郡佐山村	土屋了真
一圓二十錢	兵庫縣武庫郡御影町篠坪	山口壽美
三圓	埼玉縣大里郡用土村	齋藤 眞宏
五圓	群馬縣太田町	長 念 寺
一圓二十錢	郡山市善導寺	河野大徹

それは勝蔵も地下で喜ぶことでせう。参りませうかなといふ。

この武藤家から、勝蔵の墓までは上り道で一里餘もあるかも知れない。しかし、雨の中を私達を運んだ車は間もなく、その墓の近くへ停まつたのである。

勝蔵の墓は、可哀そうに、たゞそれらしいとわかる程度の小さな石地藏である。一字も彫んではないのである。勝蔵は四條卿の家来として越後口の戦まで供をした。

そして武功をたて、東京へ戻ると、こゝでお暇になつた。その時は立派な武士にはなつてゐるが元々甲州やくざ上りの子分達と共に、勝蔵は堂々として黒駒へ戻り、やがて金山の探掘をはじめた。こゝ迄は、わかるが、その後どうして、甲府の半へつながら、こゝで毒殺（一説には銃殺）されるような事になつたか、本来ならば、官軍として相當の恩賞にもあづかるべき筈であるのに、こんな

哀れな末路となつたものか、それは徒らに想像許りで、本當の話はわからないのである。もし勝蔵に、こうした最後が無かつたならば、彼は立派な勤王家として、やぐざ時代の一切の事が帳消しにされ、清水の次郎長以上に世に傳へられたかも知れない。人間の運不運、持つて生

れたものは、こゝいふ處にもあるものである。

石地藏の下には、桶に入つたまゝの勝蔵が埋められてゐる。その穴掘りをした時に、誰やらが純金の煙管を穴へ落した。今なら何百圓の品物であるから、もし、勝蔵の碑でもたて、墓を掘るような事があつたら、どうかこれでも探して下さいと、その落主の子といふ人が堀内翁へ頼んでゐた。

落した人は、恐らく勝蔵への供養のつもりで取上げなかつたのかも知れない。が、その子とその純金に心を殘してゐる、何んだか人間の浅ましさをまざぐと見せつけられるような氣がする。

日がくれて雨はやまないが、私の耳にはまだあの鶴鶴の聲がきこえてゐるようではなかつた。

甲州の山々は見えない。

私と堀内翁は黙つて車の中の人となつてゐた。翁は、何々を考へてゐたか知らない。私は、武藤家の狭い縁に立つて鶴鶴をきいてゐた自分自身を、そつと抱くような氣持であつた。

X

X

X



大男一元危篇

朝 鮮 武 内 竹 美

酸素吸入只樂であれ吾子の呼吸

吾子危篤輸血の針に必至の眼

評

私は前書きつきの句といふものを好まない、しかし、この句にはうたれた。これも私の持論だが、實際の句ほど強いものは無い。作つた句はイヤ味だ但其人の腹から出た句は、句の好拙に拘はらず、人に迫る。

鳥山町 大 輪 清

學校は出ぬが母炊く飯美味し

評

母はソマツに出来ぬもの、勿體ないもの、句に現すとさきも趣意の注意をしてほしい、私は母といふ字を見て涙が出て困る、この句ももう少し饒成を要する氣がする。

野間縣 水 野 藤 花

キヤラメルに饅頭のたかるを見てむ

なし

評

よく詠まれました。むなしが大變よいと思ひます、これで句が生まれます、此作者に押賣のつまらぬ品を唯々と買ふとか、隠れて膳料を乾ききりとか、猫の出で苦難の跡しやべり出すとか、

ホンの少し推して下さつたらと残念に思つた、遺憾無く二十句出すとよい、いまに必ず進展するタチの人だ。

縣北市 山田眞美子

在りし日を語るや兄の文机

評

私も師を失ひましたとき、文机の野氣は母の志といふ句を作りましたが、こうした句は文句なしにいただけます。しかし平凡といふ感じは仕方が無いと存じます。

小樽 平井正念

黒いけどなつかしい土の顔

評

田舎へ行くといつてもさう思ふ、ことに食糧問題、人口問題、健康問題の重疊するとき、この句にひかれる、黒いけどに對し、黒いけれど、黒いけれど、黒いけど、といふ考へて見たが「黒いけど」は吾々が年中やる常套語だけ、それだけ大衆的で親しみがあり、なまじ手を入れぬ方が素朴でよいと思つてもみた、乞教示。

大阪市 島本八重

肖像が出来て涙があらたまり

評

同じ人に今迄くしれとお禮者は注刺するの句あり、只讀みて念拂する。

栃木縣 萬壽云海

痛む齒に小さき手を乗せ眠りけり

八戸市 成田光雄

若妻の乳房がうづく子の臍す

陸軍軍醫學校 中村芽男

病床に念佛の數眠りつく

宮崎縣 小牧 富

發表日告げねど知れる子の笑顏

大分縣 石堂惜子

もの言つて呉れれば藝もさせたい

氣

大 阪 小 林 忠 樂

日に變るかやく御飯に喜ぶ子

判 司 無 德 庵 主 人

春彼岸修羅と飯鬼との世相なる

福島縣 古川喜作

この寄附へ舊敷が無い自覺なり

栃木 大 輪 清

春の川流れ見てゐて眠くなり

川柳家は擧げられたものなので、特殊の

カンのあるものはかりです、ですから

俳句の様に一般的ではありません、それ

だけ作りにくいのです、又それだけ見

どころもある譯です。私の古い友達に

吉川雄二郎といふ川柳家があり、

今は吉川英治といふ名で小説を書いて

居ます、その川柳で銀へたコツがど

の位、小説に役立って居るか判りませ

ます、宮本武蔵なんて見るとよく判

ります。吾々の生活は川柳によつて大に

旨味が出て來ます。

投稿規定

はがきに一回句數に制限なし（淨土・桐樹柳壇係あてに送ること）

早川 右近

酷薄は宿命だけを取り上げる

磯部天邪鬼

母の昔が漾つた木綿もの

中村富山人

風に負けさうに旅人海へ行く

田邊幻碧

やつかみを姉は靜に目にふくめ

富士野談馬

こは米屋だと復知つて居る

山本半竹

何となく嫁ににもよし櫻咲く

長島帶輪

日本人の妻となり日本人の母と

なる

信田 芳枝

考へて考へぬいて着替だけ

牧 四方

下水工夫好い眼をしてる飯を喰

べてる

水枕淋しくなると母を呼び

北原龍郎

トーストに朝の思考のとのへ

る

村田 周魚

只今の聲おかへりの聲つきあ

り

狩野柳行兒

朝飯の靜かなものに紅生薑



短篇

新

生

御佛に生かされた経験談

坂本節子

南風のせいにかその日は朝からむし暑く、起さるさう／＼身體はだるいし、頭のはつきりしない日であつた。だから外出するにも氣が向かなかつたが、ずつと以前に私の家にゐたことのある書生に、今度初めて赤ちやんが生まれ、何か祝つてやりたいと思ひながらついつい延びてゐたので、せめてお宮詣りのすまぬ内にと思ひ切つて豫定通り女中をつれて買物に出た。

新宿のある百貨店に入つて、賣場をグルグル

ルめぐりあれこれと品選びをやつてゐる内に混雜する人にもまれたせいか氣分が一層悪くなり、急にクラ／＼と眩暈を感じ、これはいけぬと思ふ内に心臓の動悸が耳に響くやうな氣がして身體中の血が一度に顔に上つて來たのではあるまいかとさへ思はれた。

たしかに持病の心機亢進が起つたに相違ない。やつぱり出て來なければよかつたと悔まれたものの、かうなつてからでは致し方ないので一まず女中を買物にやり私は休憩室で休むこととした。腰かけに身體を埋めるやうにして極力休んでゐる内に、動悸が靜まるどころか不安は逆つて募り、獨りであるの

が何うしても耐へられなくなつて、たうとう店員にその旨を申し出で醫務室に休ませて貰ふこととした。

階段の下に設けられてゐるらしい狭い醫務室には折悪しく係りの醫者さんはゐなかつたが、中々親切な看護婦さんがゐて、色々と行届いた手當をしてくれた。かうして手當を受けながら私はこんな時こそお經でも誦したらと考へつて、暗記してゐる限りのお經を誦してみたが少しも落ちついて唱へられないばかりか、容態はますます悪くなつてゆくやうに思はれた。女中に云ひつけて私は夫の動先と普段かゝりつけてゐるお醫者さんとに電

話をかけさせ、どこまで来てくれるやうにと頼んだ。

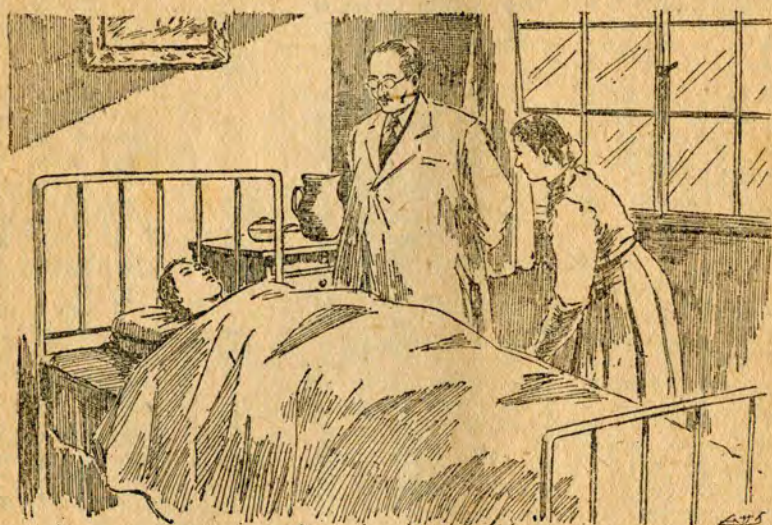
その内にも不安は募るばかりで、手足もすつかり冷たくなつてしまつた。

私はここで獨り死んでゆくのに違ひないといふ氣がして來て心細い限りであつた。かう長く亢進状態が續いては今度こそ心臟が參つてしまふに違ひない。死といふことは發病以來度々考へさせられてはゐたものの、今度といふ今度こそは最後であらうと考へた。

涙はとめどもなく出て來る。かすれるやうな咳が出て來る。看護婦さんが「皆さんの顔をよく御覽になつてあらつしやいませ……」と云ふ聲が、おほろげに聞えて來た時には何んとかしてもう一度助かりたいと云ふ氣持さへも消え失せて、根も力も盡きはてるやうな氣がしてしまつた。

その内に電話で知つた夫や掛りつけのお醫者さんが駆けつけてくれた。だ

から少しは安心して落ちついてもよい筈なのに、事實は私が今ここで死んで、私の遺憾を



運び出す夫の姿や、私のお葬式當日のこと等が次々と疲れ切つた私の頭に浮んで來るのであつた。デパートの階段裏の狭い醫務室であつた。それ以上人生の幕を閉ぢるのも定められた因縁かも知れないとも考へた。

もし御佛のお心が、この私といふ一個の人間の役が済んだのでお引取り下さるものならおさらばしようし、まだ仕事が残つてゐると思召すならお心に從つて私は生きなければならぬ。凡ては御佛の御意のまゝである。何の位の時間が経つたか別らぬが、やうやくのことに私はこれまで思ひ當ると不思議に私の心は落着いてきた。止まらぬ涙を通して明るい静かな世界が見えてきた。私は微笑むことが出來て來た。

静かな世界ではあつたが、それでもその中に越し方の事が走馬燈のやうに現れて消え、消えては現れて行つた。かうしてゐる内に今度は静かな世界の中に何か音が聞えるやうに思はれた。それは自分と何物かと交流するやうな音であつた。あゝ私は御佛に生かされて

あるのだ、御佛が今ここに生きてゐるのだ、私はまだ生きられたのだ。今こそ私は新生したのだといふことが理窟なしに信ぜられて来た。

三和寺のある附近

小 俣 眞 誠

三和寺のある朝鮮鎮南浦の龍井町の地方の冬は文字通りの結米期です。何も彼も凍れるものはみんな凍つてゐます。歌の文句をそのままに雪に米に閉されての冬ごもりです。遙かに見下す大同江には毎日流水ばかりで船の運輸も見られませんか。解米すれば魚類の群揚げで難着するといふ漁場の方もごく静かです。しかし日本一と呼稱せられる精米所だけは一ヶ所として静かな日はありません。搬入口からはヨボガ後から／＼とモミの俵を荷車から下してゆきます。それがもう搬出口からは立派な白米の俵となつてどん／＼驛へ港へと目まぐるしく積出されてゆきます。

ここは米と埃の都です。驚く程大規模な精

かくて私の身体の中には生命がもどつて来たのである。今の今まで死ぬと思つてゐた心の暗さがまるで一場の悪夢のやうに思ひ返され、力強い光明が身体一ぱいに満ち溢れて来

米所が汽車と船とに便利のよい地域を全部占領して、倉庫と作業所とを整然と並べてゐます。その米の作業所から飛散する埃たるやこれ亦目も口も開けられぬといふ仕末です。その埃の中で白い鮮服を纏つた労働者が無精ヒゲを凍らせながら立ち働いてゐます。

かうして今までは米の都として有名だつた當所も、今度は時勢によつて汽車と汽船との便利が宜しいところから日産、理研、等々といつた大企業社があり餘る土地を利用して、夫れ／＼大工場を建ててゐます。やがては煙突の林立する日もさほど遠くはないことせう。

るやうに感ぜられた。かくて私の無明の過去は命がけの涙で洗ひ淨められた。かう考へ及んで私は急に未だ／＼残されてゐる役目があるのに氣がついた。とに角先づ第一に南無阿彌陀佛と高らかに唱へながら生きてゆかねばならないのだと知つた。私の消えかゝつた生命が再び燃えて来たのは南無阿彌陀佛の力であるし、失ひかけた生命を拾つた歡びはそのまゝ南無阿彌陀佛と唱へて暮す新生活への喜びであると思つた。今の今まで私の胸の中に侵入り込んで慘々に私を苦しめた病魔は何處に行つてしまつたものだらう。いや病魔そのものはさう簡単には逃げ去りはしないに相違ないから、必ずや身體の片隅にゐるのだから、私が御佛の光を感じ生かされたので、病魔もきつと明るい微笑むものとなつたのかも知れない。それでなくてはかうまで私の身體の中から力がもりあがつて来るわけがない。私は新生の力を感ずると同時に自然とお念佛が口をついて出た。



佛前結婚式の話

中村 辨康

一、佛教の結婚は！

人倫の大本である結婚は、嚴肅な禮儀を以て行はなければならぬことは、敢て言をまつまでもないが、それが單なる儀式であるか、又は深い意義がこめられたものであるかに依つて相當の開きがある。

昔の、と云つても徳川時代であるが、小笠原流などの複雑な九獻の式などは、大體に於てすたれ、現今では至極簡單な神前結婚の舉式が多いやうである。之れは簡潔を求むる時代思潮の然らしめたものであらう。然しその式は神前に於て結婚の誓を立てることが中心のなもので、それ以外には意義がないやうに思はれる。その道の人に承らないからかも知れない。間違つたら御詫びするが二三回列席し

た貧しい經驗では別段深い意味が籠められて居ないやうに見受けられた。

それに比較すると佛前結婚式はもつと意味が深いやうである。即ち佛式では人生のスタートとしての「覺醒」を中心に式が構成されて居るからである。

第一に式中に酒を用ひない。披露宴では一般のしきたりに準じて酒を出しても、式そのものには酒を使用しない。之は何故であるかと云ふに、これから人生の第一歩を踏み出さうとする時に於て「酔つばらい」から初めると云ふ不合理は全然認めて居ないからである。南洋や亞弗利加などの未開人の宗教では「酔ふ世界」は「神の世界に近い」と思ひ誤つたところから「忘我」若しくは「沒我」の陶酔境を「酒」又は「煙草」に求めたものである。佛教にも三昧

境を求めるものもあるにはある。然しそれは單なる陶醉ではなく「眞如三昧」とか「法華三昧」とか「念佛三昧」とか云ふやうに、それ／＼色々な異つた内容があつて、凡情活動を否定した一時的な非思量底を通過したものゝ眞の「覺醒」を求める爲である。釋尊が始めアララカラーマやウツドラカラーマなどから教へられた催眠的三昧境を否定して「非聖求法」なりとしたのも、それらが單なる陶醉に了つて居たからである。

佛敎は何處までも覺醒第一主義である。だから結婚式に於ても「酔ふこと」を取り入れて居ないのである。

二、佛式結婚の奥據

一體佛敎に於て結婚の式を行ふことをもつて、一般には奇異な感じを持つやうである。佛敎と云へば「葬儀」を聯想し「婚儀」などは凡そ縁が遠いやうに思はれ勝であるが、これは佛本行經や過去現在因果經などに據つたもので、實には釋尊の前生の故事に則つたのである。

太古、蓮華城に降怨王と云ふ王様が居た時の事である。雪山の南に珍寶仙人と云ふ學者が居て五百人の弟子を持つて居たが、その上首に「雲童子」と云ふ青年が居た。既に

學ぶべきものを皆な學び盡くしたので、師匠に報恩して故郷に還らうとした。然も師匠は智徳に勝れた雲童子を手離すのがおしいので、一つの難題をもち出しそれが契ふならばと云ふのだつた。その難題と云ふのは師恩に對する代價として「金の杖、金の三叉の木、金の瓶、金の鉢、五百の金錢」などを要求されたことである。

そこで雲童子はそれを求めるべく暫くの暇を乞ひ受け、諸國に旅をした。諸國の學者や長者に會つて道を説くと何れも皆な感歎しないものはなく、殊に輸羅波奢城の祭祀徳波羅門と云ふ大富豪は非常に歸依して、遂に一つで十萬金もするやうな金の傘とか殊勝な美しい革の履とか、金の杖、金の三叉、金瓶、金鉢及び金五百錢等を布施された。此時一人の上座婆羅門が居たが、雲童子の智徳に蹴落されて上座たることも出來ず、莫大な布施をも得られないのを恨んで、一つの誓ひを立て「生々世々彼の雲童子と一緒に生れ合せて此の怨を報はずには置かない」と決意した。これが後の提婆達多であると云はれる。

雲童子は遂に師匠の望む品を得たので、雪山の南を志して戻りつゝあつた。或日蓮華城に到ると、町の中はすっかり奇麗に莊飾されて居るので、何事があるのであらうか

と路行く人に質ねると

「燃燈佛と云ふ御方が此の國に來られて、色々尊い御教化をして下さるので、王様が大概お喜びになつて人民もして大歓迎をなすやうお命じになりました。町の人達も大變な氣組みで燃燈佛様を御供養したいと色々に莊飾をして居るのでございます」

と云ふ。そこで雲童子は心に思ふやうには

「この方は乾度菩提を得られた威徳自在の人であらう。

私も暫く止まつて燃燈佛を供養禮拜し、未來の證得菩提を立願しやう。そののち師恩を果しても遅くはない。

然し一體何を御供養したならばよいであらう。傳へ聞くところによれば佛様は金錢財寶の供養を喜び給はず、唯だ法供養を稱譽し給ふと云ふが、私はまだ正法を得たと云ふ確信がないので、妙好の華を獻じて作佛の因縁としたいものである」

と、花屋を尋ねて歩いて見たが、

「大王様が燃燈佛様に御供養になさる爲に國中の花と云ふ花を全部お買上げになつて一本もございません。またよし假にあつたところで他の者に賣つてはならぬお達しになつて居るので」

と、何の花屋でも同じ言葉で何うしても華を得ることが出来ない。雲童子は心配しながらあちこち尋ね歩いて居ると、一人の水汲み役の少女が瓶の中に七本の優鉢羅華（蓮の一種で花色は赤と白の二種ありと云ふ。青蓮華と譯するのは尼羅烏鉢羅華のこと、之ではない）をかくし持つて居るのにバツタリ出會つた。その女は「賢者」と云ふ名である。雲童子は喜んで

「私にその花を賣つて呉れませんか。私は今ま五百の金錢を持つて居ります。このお金を全部あなたに差し上げますから、その七本の花を賣つて下さい」

と請ふと、女は

「貴方はお聞きになりましたか。燃燈佛様が此國にお出でになりますので、王様が國內四百八十里四方におふれを出され、香油華鬘の類は一切賣ることを禁ぜられました。若し賣る者あらば王様が一切お買上げになるからです。處が此處に一軒の華鬘作りの人があり、私はその娘さんと仲がよいので、その娘さんが私かに七本の花を盗んで私に五百錢で賣つて呉れました。私は誠に國禁を犯した譯です。然しさうしてまで花を得たのは私も亦た佛様に花を御供養したいからです。だから此

の花は差上げることが出来ません」

「イヤお話しはよく分りましたが、私も是非花が欲しいのです。では五本だけでよいから此五百兩で賣つて下さい」

「貴君は此花を何になさりたいのですか」

「如來様の出世には『見難く逢ひ難い』と承つて居りますが、今ま幸ひにもお逢ひの出来ると云ふことは、實に此上もない幸せでございます。私も是非燃燈如來様に此の華を獻じて將來私自らの成佛の因としたいと思ふのです」

「貴君の御様子を拜見しますと誠にお立派であり、お心もまた勇猛精進に眞に法を愛するお方と思はれますから、必ず無上菩提を誠得なさいますに相違ありません。如何でせう。私を貴君の道連れにしては下さいますまいか。生々世々貴君の妻となつて貴君の道を求められるお手傳ひをさせて下さいまし、貴君が佛を成就なさいますならば、私は直ぐ様髪をおろしお弟子となつて修行致します。若し此の一事を御許し下さいますならば五本の華を差上げませう。若し足手まとひになつて嫌だと仰るならば私も華を差上げることをお斷り致します」

す

「私は吠陀を學んで居る婆羅門であります。その吠陀の中に、若し人、無上菩提を求めて菩薩行を行ふならば、一切衆生に憐愍と安樂とを與へなくてはならぬ。若し求むる人があつたならば、妻子財寶少しもおしむところなく之を與へよと云つてありますが、もしさうした場合に私への愛戀心から私と別れるのが嫌だと云つて、私の布施行を障げることがあつてはならないと思ひます。その時にはいさぎよく私から別れて行かねばなりません。この誓ひが出来ればあなたを私の妻と致しますせう」

「お誓ひ致します。若し私を貴君から乞ひ求むる者がありましたならば、貴君の成佛の爲に私は潔よくその者の奴隸になりませう。また愛子を求め財寶を求むるものがあつた場合も決して貴君の菩薩行のおさまたげは致しません」

そこで男は五本の花、女は二本の花を分け持つて、遙かに燃燈佛の來たり給ふに近づき行き散華供養をした。王様はまたあらゆる澤山な花を散らして供養された。ところが不思議なことには王様の供養した花は地上に落ちたが、二

人の花のみは天蓋の如く空中にかゝつた。此の因縁に依つて生々世々夫となり婦となり、今は淨飯王の王子悉達多太子、及び善覺王の王女耶輸多羅姫と生れ合せて、夫婦となり佛道を成就したといふ説話が則ちそれである。

三、佛式結婚の式次第

佛前結婚式は各宗とも夫々制定されて居るやうであるが、淨土宗に於ては明治の末、東京の増上寺に於て小冊子を出版したのが制式の始かと思ふ。然しそれは第一式と第二式とに別れて、第一式は佛前で壽珠の交換や誓約が行はれ、第二式は座敷で九獻の儀を行ふと云ふやりかたで、やゝ複雑の嫌ひがあつた爲か餘り廣くは行はれなかつたやうである。大正年代になつて山崎辨榮上人制定の佛前結婚式が光明會の人々の間に行はれた。それは前述の佛本行經の故事に則つて獻華と誓約と傳火との式が取り入れられた一種清新な香り高いものであつたけれども、何となく西洋臭ひところがあつたので是れ亦た一般には是認されなかつた。

其後渡邊海旭先生が表白文、報告文、宣誓文、證明文を作られ、式次第を定められた。

その次第を擧げて見ると

成婚式次

- 一、金鼓告祥(太鼓を打つ)
 - 二、佳賓入場(來賓着席)
 - 三、兩位着坐 媒酌親添
 - 四、遍布瑞華(天童天樂にて散華す)
 - 五、戒師昇堂(戒師佛前にて三拜後道場洒水をなす)
 - 六、奉告請祐(戒師佛前にて表白文を讀む)
 - 七、登壇乘式
 - 第一、聖水灌頂(新郎新婦に洒水す)
 - 第二、歸依三寶(懺悔、三歸、三竟)
 - 第三、淨戒授與(三聚淨戒を授く)
 - 第四、光壽課號(日課念佛授與壽珠を授く)
 - 第五、讀誦聖典(淨土三部經の一節を讀む)
 - 第六、勸誠訓話(新郎新婦への訓話)
 - 第七、宣誓盟約(新郎新婦宣誓文を讀む)
 - 八、表賀證明(祝辭祝電及び來賓總代の證明文)
 - 九、終式奉告(戒師佛前にて報告文を讀む)
 - 十、禮辭謝言(親戚代表の謝辭)
- 以上のやうであるが、之は昭和八年頃の「宗報」にもの

せられて居る。現今では之れに七本の花を五本と二本に分けて新郎新婦が佛前へ献花することを聖水灌頂の前に行ふ人もある。大體に於て此の式は一般に廣く行はれ、各宗でも參考にして居る人が多いやうである。昭和十四年に淨土宗法式協會が選定した佛前結婚式は「淨土宗法要集」にのせられ淨土宗公認の式となつたが、大體に於て讀物は渡邊先生の用ゐられ、順序もよく似て居るものである。

- 一、報鐘、
- 二、來賓着席、
- 三、兩親及親戚着席、
- 四、開式告辭（開會の挨拶）
- 五、奏樂（此間に新郎新婦媒酌人入場）但し新婦は七本の花を持つ
- 六、新郎新婦媒酌着席
- 七、道場洒水、
- 八、道場散華、
- 九、導師昇堂、
- 一〇、恭教三禮（止樂）
- 一一、奉請（三奉請又は四奉請）
- 一二、表白（導師佛前にて表白文を讀む）

- 一三、告諭、
 - 一四、行華燒香（新郎新婦の献華）
 - 一五、聖水灌頂、
 - 一六、懺悔、
 - 一七、三歸三竟、
 - 一八、授與十念、
 - 一九、日課勸獎、
 - 二〇、壽珠授與、
 - 二一、誓詞朗讀、
 - 二二、成婚奉告、
 - 二三、祝辭祝電、
 - 二四、謝辭、
 - 二五、閉式告辭、
 - 二六、導師下堂奏樂、
 - 二七、新郎新婦退堂、
 - 二八、親戚來賓退堂、
- 以上であるが、時間は大體全部で四十分もあれば十分である。

四、佛式結婚式の感じ

私達は度々此の式に参列もし、また度々戒師の役目もしたのでさ程にも感じないが、一般参列者の話をきいて見ると、神前結婚式よりもまた基督教結婚式よりも、壯嚴で重々しく非常によい感銘が與へられると云はれる。私が神前結婚式に参列しての感じは、極めて事務的であり簡單明瞭ではあるけれども、餘りに簡單過ぎて何となく人生の第一歩を踏み初めるには物足りないやうな思ひがした。

神前又は佛前の莊飾并に奏樂は大差ないとして、神式はのりと玉串捧進と誓詞と冷酒の盃事で終るのに對して、前述の式次にも示されてあるやうに佛式はもつと複雑で意味が深い。殊に訓話を取り入れられてあつて、夫婦はまづ精神的結合即ち心と心との結び付きを強調され、二世三世はおろかのこと、生々世々互ひに助け助けられつゝ覺醒の生活を完成せんとする誓ひを立てるのであるから、結婚第一日の感銘は恐らく深いものがあつて、終生の指針ともなるであらうと思ふのである。

例はへ表白文の一節にも

「(前略)原るに夫乾坤の兩儀は其徳を合せて萬物成育し、陰陽の二元は其位を正しくして萬類昌長す。菩薩の大行は依りて以て立ち、淨業の正因は取りて以て固し。

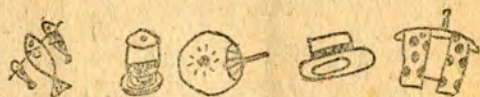
是故に華燭の大禮を正しくして倫常の大本を示し、笙歌の嚴儀を設けて道義の根底を明かにす。豈佛陀の護念、神明の加佑なからんや。伏して願くは新郎の才徳益々高く、新婦の貞淑彌々美しく、相愛し相敬し夫唱へ婦隨いて家庭の清範を示し、互に信じ互に頼り内に助け外に力めて國運の隆昌を助け、福智共に進みて偕老喜びに充ち、信行互に勵して雙棲幸多く、鸞鳳和鳴して永く聖代の恩光を歌ひ、琴瑟偕調して長へに奎運の旺昌を頌せんことを云云」

と云ひ、宣誓文にも

「(前略)伏して希くは嚴戒慈訓の教ふところを遵奉し、今日の心を以て終生の心となし云云」

と云つて居るやうに、心をしづめてこれらの文を読み聞かす時、肅然としておのづから襟を正さねばならぬやうな氣持が起るであらう。何しろ新郎新婦は心が一杯になつて居る際であるから、靜かな莊嚴な式が進み、朗讀される文句が耳に入るに随つて、次第に落ちつきを取り戻し、新らたなる覺悟をふるひたしめられる。そこに結婚の式の大きな意義があるのではあるまいかと思ふ。願はくは試みに一度佛式結婚に参列してその式をよく味ひ且つ批判して頂きたいものである。

おやさん



作 隊 漫 新 ①

歩けく
山崎 一
坊は
偉いから
歩くな
ウン



兵隊さんを
思へば平気だ
ウム
さす
ちや



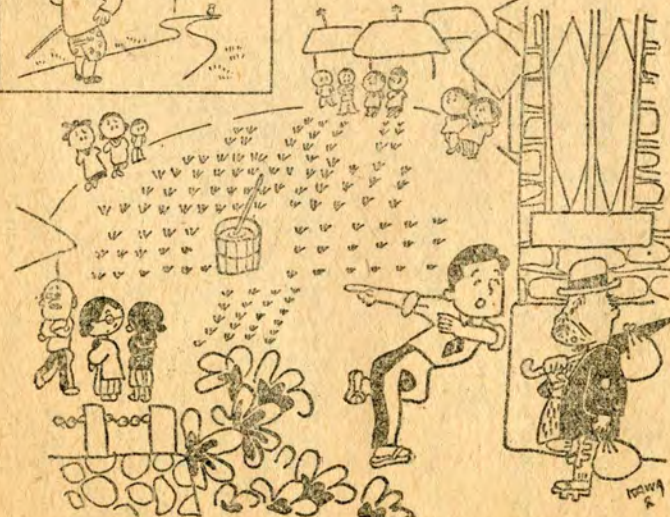
どうした
坊や
くたび
れたの
か



「そう無茶に
起すなよ
一寸ねかせて
くれムニヤ」
(おやさん 腹減り)



上京した親父さん (川口 久)
アッお父さん丁度よい所だ
これから先を教へてくれませんか



衣更 (川口 冬)
 サアみんな
 去年のを
 順々に
 お下りだ
 一ツ残つ
 たワ
 もう一人男の
 子を生ま
 なくちや



足が痛い？
 歸りは
 やつぱり
 電車で
 行うね



オヤ
 何を
 持つて
 来たのだい
 ローラスケート



だから
 歩く
 ウーム
 さすが
 わしの
 子ぢやヨ



歡喜力行 (山崎 善一)
 「最近のお客は演らない
 うちから、これだ、
 弱つたネ」



お手のもの
 井戸堀やさんが
 卒先手傳ひました
 (さき原 賢次)



信 仰 相 談

當 擔

中 村 辨 康

(迎 歡 問 質)

有 髮 と 無 髮 、 五 重 と 授 戒

問

一、有髮の佛像の

由來。

答

有髮は大乗佛教にしかありません。大乘教は小乗佛教にあきたらぬ在家の人と出家の中の理想派の人とが、形

二、特に地藏菩薩のみに髮の無い理由
三、僧侶が除髮する由來。
四、五重相傳と授戒との二元的對立する理由如何
五、戒の必要性(淨土宗の立場より)

次に僧侶が除髮したのは在家でないことを表象する爲めです、ひとり髮の問題ばかりでなく衣服も在家的な美しいものを嫌つてボロを集めて一色に染め(泥で)壞色と云ふ色の着物を着たのであり、物も鹽とか若干の薬とか食器とか水こしとか三枚の着物とか以外には貯蔵することも禁じられて居たのです。

田説子
(新濁・三條・山)

四と五との問題に就いては私の意見もありますが、大野先生へおゆづりして、大野先生から御答へして頂くことにしました。

(以下五重と授戒、戒の必要性の二題につ
大野法道先生より御回答下されまゝい
た。一係)

淨土宗では重要な傳道形式として五重と授戒を勤めますが之は古來よりの風習であり、且つ淨土宗の信仰生活を二つに分けて指導するのハッキリする爲めでありました。従つてお賀ねのやうに決して二元的に對立してゐるわけではありません。

五重に淨土宗の根本信仰である念佛申して往生極樂する道の深さを明らかにし、念佛門の祖師である善導大師や法然上人がこの道に徹到せられた尊い事蹟を回顧して、相傳を受ける人は祖師が歩まれた道と一つの道を歩むことになる嚴肅な法儀であります。授戒は元は天台宗で説く圓頓戒を授けるのであります。が、元は天台のものでも淨土宗へ流れ込んだ已上、それは念佛生活に融合すべきものであ



信仰相談

はならぬことは、念佛の一行に結歸するのは宗教的に生活創造の主體を見出だすことであり、生きる道の根を下

ります。戒は次ぎに述べるやうに人間の日々の生活の調正でありますから、淨土宗の戒は念佛によつて正しく生きてゆく道の外のものではありません。淨土を欣求する人の日々の生活がいかに張り切つたものであるか、また陥るべからざる事を慎んで行くかを指導するのが授戒の使命であるから、之は往生する道の廣さを明らかにするものであります。

次に淨土宗の立場から戒は必要かとのことです。勿論必要です。戒なくしては眞の信仰生活は一日も成立しません。之に就て宗典を讀むと、淨土宗はたゞ念佛のみを選取し、餘の一切の行を捨てると記されて居りますから戒がいかに立派なものでもそれを取り上げる

ることであるから、それを基本として形造られる日々の生活の姿は、念佛の含む萬徳の人間の具現でなければなりません。

法然上人は念佛は主人の如く、餘の善は客の如し。されば餘善を嫌つてはならぬとも言はれ、酒肉に溺れた人達を戒めて、いかに念佛申せばとて身の慎みを失ふべきではないと強く譴責されました。また淨土宗は三學

（戒・定・慧）無分の凡夫の爲の道と言はれますが、之は聖道門の三學を捨てるのであつて、淨土門には獨自の三學があるべきであります。戒に就てそれを見るなら、生活の調正の完成を目指してたゞ自分で剛愎慎んでゆくのは聖道門、佛の慈光に導かれ念佛をたよりにして日日をわが分に應じて調正してゆくの

が淨土門であります。本より三學なるものは佛道の三原則と言はれるけれども、實は人間

死 後 と 淨 土

の道として生活の調正と肚の坐りと道の見定めとは自然にあるべき筈のもので、必ずしも佛教が始めて設けたものではない。従つていかに三學無分と嫌つても、人間の道を説くかぎりには此本則の外へ出られるものではない。一定の規則を然も完全に守ることを戒とするのではなく、日日出遭ふ一切の事件を念佛申す心で處理してゆく、勿論その中に國民として國家に御奉公する事柄も含まれるが、わが身の爲すべき事に勇敢熱誠であり、爲すべからざる事に陥らぬ警誠をもつのが、念佛申す者の現實の姿で人一倍その顯はれる所に念佛の力の偉大さを感じる。之が淨土門に具はる戒であります。必要だから戒をやるのではなく、念佛申す生活の中に自づから備はつてある生活の調正であります。

問

私共が死んだら何處へ參るのでせうか。佛法の多くは方便説であつ

て、死んだら地水火風にかへり、亦た現世へ生れ、今の果報やら願ひやらに依て、或



信仰相談

は馬などに生れ、最上の者は人間に生れると云ふ人がありますが、淨土とは如何なるところでせうか。眞實のと

ころを御教へ下さい。

淨土が結構な處で親子共に樂しむことの出来るものなら組合もありますが、別れ別れになるなら頼りない心持が致します。本當のことを聴聞致したうございます。

(新潟・西蒲原・坂井輪・今井)

答

私達の日常生活は六道輪廻の生活です。六道とは六通りの生活様式のこと、わけても色々な欲望の爲に煩悶苦惱したり、お金は欲しいが働くのは嫌だつたりする地獄道と、欲しい／＼足りない／＼で居る餓鬼道と、唯だ牛馬の如く何がなんだかわらずに饑餓として働いて居る畜生道との三は、唯苦にあへいで居るのみであつて、そこに何の樂しみもないから之を三惡道と申します。また他の人を押しつけても勝たうとする

修羅道と、世間體を考へたりお體裁を飾つたりする人間道と、樂隱居を好む天上道との三は多少自惚れや樂しみもありますから之れを三善道と申します。この六種の心狀は誰にもあるもので、毎日のやうにあつちに行つたりとつちに來たりして心をうごかして居りますので、畢竟「輪廻生活」と云はれるのです。

此の一生涯の輪廻生活中、何の心が一番多く働いたか、との働きの多少に従つて集積された力の強弱が死後を決定致します。最も強力なものが大ぎの生を引くのは當然であつて、

物理的原則から云つても否定は出来ません。此の故に人間が死んで何處に行くかは其人の一生涯を決算して始めて決定されるものです。然しながら結果は原因だけでは現はれません。現はれるのは現はれるだけの條件が必要です。たとへば花の種があつても土や水や日光や空氣や肥料や天候や時間や人力などの諸條件が適當に案配され結合されなくては花が咲かないやうなものです。成る程人のからだ即ち血や肉や皮や骨は地

飲めば益々

元氣旺盛

無(にんにく粉末)コナワサビ
臭(固形にんにく)そてつ粉末

特約店大募集中

静岡市上香谷町

神谷昌孝

電話二八六三番

振替東京一四六五一番

水火風の四大元素に還元しませう。それはそれらの集合結合に依つて人體が出来て居たからです。之も當然のことです。元素としての分け方は大ざつばですが、眞實であることは疑ひをさしはさむことは出来ません。つまり固形のを「地」と云ひ、流動體のを「水」と云ひ、溫度を「火」と云ひ、動く力を「風」と云つたまでのもので、化學的元素以外に物理的な考察も加へられてあるから、大まかではあるが化學以上であると云へま



談相仰信

を反省する必要があり
ます。諸佛は自らの力
で理想世界を建設した
のです。それを「淨土」
又は「佛土」と云ひま

す。但し諸佛の淨土は阿彌陀佛の淨土に比較
すると完全とは言はれません。なぜならばそ
の淨土への入國條件が高いからです。條件が
むづかしいからです。然るに阿彌陀佛の淨土
は唱名と云ふ最低條件で誰でも入國させて
下さるのです。

あなたは阿彌陀佛の淨土の内容を云へと云
ふことでしたが、それは此の欄では言ひ切れ
ません。四十八願を一々説明しなければなら
ないからです。

無論淨土は結構な處ですけれども、單に結
構と云つただけでは説明になりませんし、ま
た結構の内容が物質的であり功利的であつて
はならないのです。「かの國の受樂無間なるを
きいて欣求するならば往生は出来ない」とも
云はれて居ります。

淨土は凡情を以て想像しては誤りです。覺
醒世界だからです。價値の世界だからです。
凡情で單に「楽しい」と云ふやうな「樂しさ」
とは違つて居ります。だから親子一緒に樂し
むと云ふやうなことが目標であつてはなりせ

ん。親子どころか、一切の上善人の俱に一緒
に價値生活をなし佛格を作り上げるところで
す。

随つて反淨土的人人は住けないのです。別
れ／＼になるものならないも、其人の心掛け次
第であつて、責任はこちらにあるのです。淨
土の方の責任ではありません。あなたは「親
子一緒に樂しむ」ことが出来ればよいが別れ
／＼になるならば「たよりない」から、それ
ならば「淨土」へ行きたくないらしい口吻で
すが、それは少し御考へが足りないと思ひま
す。

さう云ふ感情的な方面だけで考へてはいけ
ません。無論感情的には「離苦得樂」ですが、
智的には「轉迷開悟」であり生活的には「廢
惡進善」のところですよ。迷情を以て考へては
ならないのです。

無量壽經にある「四十八願」をよく御覽下
さいまし、四十八願に就いては何れ機會を得
て申し上げませう。

會 員 通 信

熱心な質問百出した

東京方面誌友會の座談

講師は佐藤賢順師

東京方面第四回誌友會は去る四月二十六日午後六時から本所區横川橋龍興院で開催されましたが會衆百十数名が参集し、盛會でありました。尙同會は赤尾光雄氏司會のもとに先づ宮城遙拜、皇軍將士感謝の默禱を行つてから、藤井龍興師が導師となり事變陣歿將士英靈追悼會を誓み、一同念佛會を修しました。次いで本會主事佐藤賢順師の講演に移り、同師から本會の趣旨並に法然上人の御遺徳の一端について述べられ、最後に同師は結局のところお念佛が心から

申されるやうになつてこそ毎日の生活に確固たる信念がもてるものであることを強調せられました。講演が終つて十分間休憩し、法然上人御一代の幻燈映寫をなし、佐藤賢順師の解説と美麗な畫面に一同先祖の御徳をしのんだ後、座談會を開催しました。同日の座談會は眞摯な質問が百出し、その何れもが日常のお念佛を申しながら尙且いる／＼と出て来る雑念の處理についてであつて、何時話が盡きるとも思はれませんでした。が夜も更けましたので名残りを惜しみなが

ら散會し、歸路についた時にはさすが東京の街もすつかり寂込んでまつ暗になつた十一時過ぎでした。

會員竹中さち子さん

大阪府貝塚町法然上人鎮仰會淨土寺支部會員竹中善三郎氏長女さち子さんは先般來病氣靜養中のところ薬石效なく遂に去る四月二十三日逝去されました。お弔み申し上げます。

◇新體下翼養教化に御一同さま御多忙のこと、存じます。先日「淨土」を拜見いたし、現地で禮拜讀今尙深く念佛門徒の喜びを感じます。おかげさまで私も教徒の一人として恥ぢざるやう一意御奉公致してをります。末筆ながら會員皆様の御奮闘と貴會の御發展を

念じてゐます。(南支派遣百武部隊 榎部隆原聖信)

◇ある日のこと山に登りましたが道がけわしく、身體にロープをつけて渡つてゆきました。やがて廣い野原に出ました。そこは實に美しい公園のやうに花が咲き木が繁つてゐます。そして佛様が何十人もゐて、十六羅漢や五百羅漢のやうな人々もゐました。私は一心にお念佛を申しましたら、その自分の聲が目が覺め、夢であつたことが判りました。こんな美しい夢がみられるやうになつたのも「淨土」の諸先生方のおかげだと有難くお禮を申し上げます。青森縣東津輕郡丸尾久)

貯金して公債を買ひませう。無駄をはぶき四恩を感謝いたしませう

近 刊 豫 告

廣島文理大教授
文學博士

山 本 幹 夫 著

法然佛教とわが國體思想

菊版一七〇頁 定價二圓位

本會出版部では近く廣島文理大學教授文學博士山本幹夫氏著「法然佛教とわが國體思想」を刊行いたします。著者が序の中で「他國の精神的基礎にまでも相通じて、しかもわが國ならではと思はしめる新宗を開創する。これが法然佛教の偉觀であり、皇紀二十世紀の劈頭にも、なほこれを反省すべきゆゑである。」と申されてゐる通り、會員各位の座右に一本を備へて、必ずや大東亞の不動の地盤確立に役立つものと信じます。

本書は序論に於て法然佛教の大體を説き、本論に入つては先づ日本と日本佛教から筆をおこして、日本佛教の展開を解明し、最後に法然佛教を詳論しながら、これこそ國民養育の教法なることを明らかにしてゐます。目下同書の印刷製本を急いでゐますので、何卒今から御期待下さい。(係)

◇(前略)小生儼昨年春ある陸軍病院に貴會發刊の「淨土」を初めて手にいたし、以前は信仰心といふやうなものは一つもなかつたので

ありますが、これを拜讀いたしてゐる内に幾分かは佛さまといふものが解つて来たやうな氣がいたしました。戦線より白衣にて内還いたし、とても内地の徒後の皆々様には顔向けが出来ないと煩悶してゐましたが、この「淨土」を拜讀してゐる内に、さういふ心も消えてしまひ、それ以來感謝で療養する氣持になり、只今では故郷に歸つて家事(農業)の手傳ひをしてゐます。しかし何んだか「淨土」(信仰心)がなくては、とても心淋しいやうな氣がしてなりません。そして何にか心に或るものを

得たいと念じてゐます。つまりしつかりした佛さまの道を知り、身は貧乏してゐても心にゆとりのある氣持になりたいものと希つてゐます。(岩手縣九戸郡輕木町長内勝造)

◇拜啓貴會愈々御繁榮賀上候
(中略) 久し振りにて眞野正順師の隨筆を誌上に拜讀致し誠に於てつかしくまた内容の以前にまして氣爽たる實に感激仕候、察するに御病氣も御快癒の御模様にて慶賀に堪へず、今後ともどしどし誌上に御康筆をふるはれん事を祈上候(世田ヶ谷區 中山生)

見本「淨土」無料贈呈 新會員のための見本「淨土」は必要部數だけ御申越次第無料で贈呈いたしますからせいで御利用下さい。

會費は前納で 本會々費は前納制度になつてゐますので、前金切れの節はお手数ながら、一年分會費金一圓二十錢也を御納入下され、引續き御愛讀の程をお願い申し上げます。



家

佐藤良智

そのものである。御皇室を中心として開顯する相貌が八紘一字の御精神であると共に現實である。

御皇室は雲の上深く申すも畏きことであるが、家の極れる御相であると拜察し奉るのである。申しあぐ

家は懐しいものである。家は温かいものである。若し祖父母あらば有難く、父あらばましてや母居まさは勿體なく、そこばくの健やかな子あらば楽しみ極まるであらう。この國の歴史を緬くに家を以つてその中心としてあるのである。畏くも御皇室は即ち日本の國

るまでもなくその御祖先をお祭り申上げたるが伊勢大廟である。御皇室は我等臣下の家の極まれる御相であり、伊勢大廟は御皇室の大廟であると共に我等臣下の大みもとをまつる大廟である。斯の様に拜察し奉れば、この國は全く家を外にしては成立し得ないのであ

る。我が國の構成單位は個人でなくして家である。個人を中心とするところに個人主義が榮えるのであるが、われわれの心の底に集く國民感情は個人を單位とすることを斷して許さない。この家々の前に全體的國家があるのは言ふ迄もないが、それはあまりにも茫漠たるもので、一般には些か抽象的なものとしてか感ずることが出来ない。國家成立の歴史から見ると御皇室即ち國家といふべきである。國土と國民はその外延にすぎない。それ故に近代國家觀念よりする所謂國家といふよりも御皇室と言つた方が日本の感情にふさわしい。

陛下の御事は申すだに畏れ多き極みであ

る。御皇室の御事はそれほどにちかぢかに心にふれる御ことである。たゞ畏れかしこみ申すよりすべない。御本尊様としておろが申すにはあまりにも畏い。まのあたり見奉れば盲ふといふ古來よりの國民感情を肝に知らねばならない。臣等我等の口にすべきは唯唯御皇室といふ言葉あるのみと私は言ひたい。御皇室は前に言ふ如く日本の家の究極相であり臣下なる我々の家はその日本的家の性格に於いて神代より一貫せるものを有するのである。家々を貫くことによつて、自ら日本といふ國家が成立し、日本の性格も明らかとなる。敬神といふ崇祖といふも所詮同じことを言ふのであつて平明に言へば「國を尊び家を尊ぶ」ことである。神祖のうつしすがた（現相）は現在の「國」であり「家」である。國を尊び家を尊ぶことは神を敬ひ祖を崇むることである。われわれの家の具體的すがたとしては神棚を祭り、國家民族の祖先を敬ひ、佛壇をまつり家の祖先を崇めることにある。この國の大部分の家が佛壇を持つことは何とゆ

かしく何と力強いことであらう。朝に飯を供養し夕べに香を焚き、季節の華と果を捧げ、掌を合せて拜む。床に生花がなくともお佛壇にさゝやかな一輪の華があるならば華ある家である。久遠なるものゝ前に咲く華。この様な華ある家は美わしい。合掌する人は更に美わしい。先祖のお位牌が外れたる息子の意見をする。それは昨日のことであつて今日のことであつてはならないのか。國民道德の根源は家になければならない。過去の日本には確かにそれが家にあつたことは識者の指摘を俟つまでもないのである。近代日本の文明開化が個人の人格の解放と完成といふことを教へた功績は確かに認めなければならぬ。しかし家を出たノラはどこへ行つたか。過ぎたるは及ばざるが如しだ。近時選舉權を家長にのみ與へよといふ叫びはその當否は別として家を中心とし、家を重んずる現れの一つと見なければならぬ。

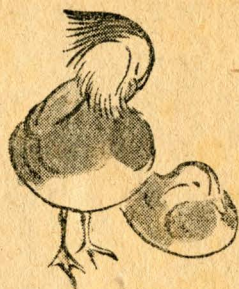
新體制運動は復古的傾向を多分に持つ。かの隣組の單位は家である。家を重んずること、は復古のよき現れの一である。しかし單なる復古であつてはならない。明治御一新とその後の發展とを内包した復古でなければならぬ。それと共にその精神はどこ迄も神代より貫く家中心觀念であり、形式は佛壇を中心とする家を通じて行はれるのが素直に國民感情に適合するものであると確信する。佛壇が單に過去にのみ連ると思ふのは誤である。過去を思ひ先祖の恩を謝することは同時に未來に連ることがらなのである。家に於ける久遠の過去と永久の未來を結ぶものは各々の家の佛壇である。佛壇のある家と無い家とその莊重さ奥床しさのみをとつてそれを思ふて見らるゝがいく。神燈の灯いた家は美わしい。旅の夕ぐれの車窓から畠の中に森の蔭に町街道に點々と明りの灯るのを見るのは美しく懐しいものだ。是のみ燈を通じて、魂のみ燈を點じたきものである。このみ燈しは家の光りであり同時に國の光りである。

忠の根源である孝の養はるゝ温床も佛壇ではないであらうか。親、孝を先祖父母にせず

して子これを行ふであらうか。一家名を恥かしめず」といふのは單に功利的のものの名譽慾と言つてよいであらうか。そこには封建的な香りが無いではない。しかしその中に凛然たる日本的性格の一端が感ぜらるるではないか。この様に家は國の柱であり、佛壇は上を戴き下を深むる家の柱である。この柱なる佛壇と菩提寺とは斷ち切り難い深い縁がある。寺院の起源は勿論遠き印度である。佛教出家者の修行道場であることは言ふ迄もない。しかし日本の寺院は日本獨特の性格をもつてゐる。それは氏寺の性格である。日本佛教は單なる觀念的佛教に止まらず、國家の佛教であると共に家の佛教である。日本佛教を一貫せるその護國的性格は佛教の實質的開闢である。それと共に日本佛教寺院の氏寺的性格は大地に足をつけた佛教の展開である。國土を離れ民族を離れて何處に佛教があらう。健やかに豊かに正しく祖を崇むる道を教え、之の道を通じて國家とその文化を育くみ更には天地法界の大道に直參せしむるを教えるのが日本佛教である。家々が氏寺なる菩提寺を今日迄維持せしめてはきた。しかし菩提寺はまた日本帝國以來の家族制度を正しく豊かに育くんで來た力を否みうるものがあらうか。日本寺院は家の柱であるお佛壇の延長である。この二つのものゝ中にその家に或は生れ、或は住める諸の人の古より現在に及び喜びも、悲しみも、寂しさも、頼りなさも、失敗も、落膽も、希望も、はげしき精進の願ひも、勳功も、或は靜かに眠り、或は今逞ましく働き、或は未來に動くであらう。そも何の寶庫ぞ。唯それだけを思ひみるも人生を豊かにし、沁々とさせるではないか。

「一人出家すれば九族天に生ず」といふ。劇しい言葉である。しかし家を重ずる日本に家を出ることは重大なる事柄である。峻嚴なる事實である。家に是を敢行し佛道に入り得道するものがあれば恐らく九族天に生ずることが出來やう。法然上人にあつては出家はさほど重要な事柄ではなかつた。全く出家在家は問題ではなく寧ろ出家を否定さる、傾向さ

へある。「念佛の聲する處我遺跡である」といふ御言葉に察せらるゝ。上人によつて新しく日本的に展開されたその後の佛教は在家佛教の性格を多分に有するものである。それ故法然上人に於ける出家は入信念佛するものと解すべきである。その様に解すれば前の嚴肅なる言葉は再び生きるものである。一家に一人念佛を行ずるものあらば九族は天に生ずるのである。沁々と有難く頂ける真理である。それは祖父母であれば有難く、母であれば家温く、父であれば家正しく、嫁なれば涙ぐましく、娘なれば家明るく、息子なれば家力強くその人を通じて必ずその家に光りがあらう。眞實の翼賛一家は一人の念佛を生活するものある家に始る。先づ自らが正しく、つゝまじき念佛行者になり家の光りとなることである。そこに九族自ら皇道を翼賛するものとなり健實なる家々を構成することとなる。家正しくして國正しく、家光りて國光り家久しくして國久し。



法然上人に物を聽く會

大原問答(二)

小西存祐

問答の性質

一

大原問答は、後鳥羽天皇^{ごとてん}の文治二年^{ぶんちにえん}（皇^{わう}四^し十六^{じゅうろく}）、洛北^{らくほく}大原^{おほはら}は今の勝林院^{しょうりんいん}の地で、叡山^{えいざん}第六十一^{だいろくにじゅういち}代の座主^{ざす}顯眞^{けんしん}法印^{ぽういん}といふが發起者^{たつしや}となり、わが法然^{ぽうねん}の御房^{ごぼう}を中心に、當時^{たうじ}諸宗^{しよしゆ}の學匠^{がくしやう}たち三百餘人^{さんひやくじよにん}との間に交^かされた問答^{もんたふ}で、文治二年^{ぶんちにえん}は御房^{ごぼう}五十四歲^{ごじよしじふしよさい}の時にあたり、開宗^{かいしゆ}に後^おる十一^{じふいち}年^{ねん}、選擇集^{せんたくしふ}の撰述^{せんしふ}に先^{さき}だつ十三年^{じゆしさんねん}目に相當^{さうたう}してゐる。

歴史^{れきし}を繰^{ひもと}いてみると、恰度^{さうど}この前年^{ぜんねん}の三月^{さんげつ}、平氏^{へいし}の一族^{いそ}が壇^{だん}の浦^{うら}に滅^{ほろ}び、源賴朝^{げんらいちゆう}が鎌倉^{かまくら}に幕府^{ぼくふ}を開^{ひら}いて、天下^{てんか}なほ物情^{ぶつじやう}の騷然^{さうぜん}たる折^せから、一方都^{はうと}から程^{ほど}とほからぬ洛北^{らくほく}の

天地^{てんち}で、かうしたみづちりとした會合^{くわいがふ}が催^{もよほ}されてゐたといふことは、聊^{いささ}か奇異^{きい}の思ひがしない譯^{わけ}でもないが、翻^{ひやう}つてまた考^{かう}へてみれば、さうした人心^{じんしん}の動搖^{どうごう}不安^{ふあん}な時にこそ、却^{かへ}つてさうした必要^{ひつやう}が痛切^{つうせつ}に感^{かん}ぜられた譯^{わけ}である。

處^{ところ}で「問答^{もんたふ}」といふと、われ／＼は直^ちきに禪宗^{ぜんしゆ}のそれから、「安土問答^{あつちもんたふ}」の事^{こと}などを連想^{れんさう}し、「宗論^{しゆろん}」といふことに想到^{きうたう}しやすいのであるが、大原問答^{おほはらもんたふ}は、斷^{だん}じてそんな殺伐^{さうはつ}なものではなかつた。もつとも觀阿^{くわあ}の『本朝宗論記^{ほんちゆうしゆろんき}』などを見ると、今の問答^{もんたふ}を、應和^{おうわ}の宗論^{しゆろん}中^{ちゆう}期^き、安土問答^{あつちもんたふ}（足利^{あしかが}）慶長宗論^{けいぢゆうしゆろん}（徳川^{とくけう}）などと並^{なら}べて、本朝^{ほんちゆう}四箇度^{しよかんど}の宗論^{しゆろん}といふやうなことを申^{まを}されてゐるのであるが、それは間違^{まちがひ}である。

それで、その事^{こと}を述^のぶるについて、先づこの問答^{もんたふ}が、宗^{しゆ}

門の傳播史上、亦た宗義史上、どんなに重要な意義をもつてゐたかといふことを、併せて一言つけ加へて置きたいと思ふ。

二

法然御房の淨土開宗が、この問答より、僅かに十一年以前の出來事であつたといふことは、前にも既に一言したとほりであるが、謂ふところの「淨土開宗」は、今日のやうに、別に式典を舉行するとか、或は堂々と宣言書を發表するとかいふ譯ではなく、たゞ御房が、黒谷(山)の坊舎の一隅で、善導の『御疏』を通じ、如來の大悲に觸れ、如來の御こゝろを掴まれた事實をさして言ふのに他かならないのであるから、謂はゞ御房の胸の裡にをける開宗に外ならなかつた。それが文書によつて、堂々と世間に發表されるにいたつたのは、それから二十三年をへた建久九年、御房六十六歳の時で、即ち選擇集撰述の年がそれである。凝然大徳の『淨土源流章』には、現にその歳をもつて、一宗の開立紀元と定めてある。

併しそれでさへ、猶ほ當時の教界にはばかつて、「一たび高麗をへて後は、壁底に埋めて窓前に還すこと莫れ」とい

つて、その門徒を誡められてある。

處がこの大原問答は、その選擇集の撰述に先だつ十三年目の出來事で、當時わが宗門のごときは、その存在さへも未だよく天下に知られてゐなかつたと言つても、過言ではなかつたのである。

凡そ御房の淨土開宗から、この大原問答にいたる十二年間に在いて、わが宗門が、社會的に世間に知られるにいたる媒介となつた事柄といへば、東大寺の再建にからむ大勸進職辭退の一件と、それから平重衡に關する御房教化のそれとが在るのみで、その他には、記録の上に何も傳はつてゐない。

先づ東大寺勸進職の一件といふは、文治四年十二月(皇一八)、恰度淨土開宗後五年目、平重衡(清盛)が、父清盛の命を奉じて大佛殿の焼打をやつたことがある。翌年六月、朝廷から御房に對し、勸進職のお勅命が降されたところ、御房は隱遁者たるのゆへを以つて、恐懼御辭退になつた。その結果、後に「大佛の上人」として知られた俊乘房重源を御推舉になつたことは、勅修御傳第三十卷その他に見へてゐる。

勿論當時は、今日のやうに、新聞だとか「ラヂオ」だと

かいつた報道機關が在つたわけではないが、事件が事件であつただけに、之に由つて御房の存在が、勘からず世間に紹介せられたであらうことは、察するに難くない。

三

次に重衡の化導に關する一件といふは、恰度その翌々年即ち元暦元年二月(皇四十八)、平重衡が例の景時らのために虜はれの身となり、御房の教化を蒙つたといふことが『平家物語』その他に見えてゐる。勅修御傳第三十の卷に、當時の光景を叙べて

元暦元年二月七日、一の谷の合戦に、彼申將いけどられて、都へのほりて大路をわたされ、さま／＼のことありき。

後生菩提の事を申しあはせんために、その請ありければ、上人おはして對面し給ひて、戒などさづけ申され、念佛のこたくわしく教導ありけり。このたび生ながら、とられたりけるは、いま一度上人の見參に入るべきゆへにて侍りけるとて、かぎりなく悦び申されけり。

受戒の布施とおぼしくて、雙紙箱を取出で、上人の前にさしをきて、申されけるは、御要たるべき物には侍

らねども、御目ちかき所にをかせ給ひて、かつは重衡が餘波とも御覽じ、且は思食し出で候はんたびには、とりわけ御同向あるべきよし、を申さるゝ。上人その志を感じて、うけとりて出で給ひにけり——と申して在る。

平氏に非れば、人でないといふやうな亂暴な言葉が、通用した當時、アノ大きな太刀を佩いで、鎧褌くろ／＼と身に化粧をさへ施してゐたといふ平家の君達——その君達が哀れにも亦た花々しい末路は、確かに當時の人心に、大きな感銘を與へたものがあつたに相違なく、延いては亦それが、宗門をどんなに世間に印象づけたかといふことは、多く説明を要しないと思ふ。

然し已上は、何をいふにも宗門の間接な宣布であつたに過ぎない譯である。大原問答は、實にこの翌々年の出來事であつた。

四

それで當時にをける、わが宗門の社會的認識といふものは、誠に之を察するに餘あるわけであるが、それが事實、この問答の席上、當時一流の學匠たち聖たちが、衷心から

歸伏を捧げ、「かたちを見れば源空上人、まことは彌陀如來の應現か」といつて、信伏をしたと言ふのであるからこの問答の結果が、初期の宗門宣布の上に、いかに甚大な効果を齎したかといふことは、容易に想像がされると思ふ。

されば醍醐本の『法然上人傳』をはじめ、『四卷傳』、『九卷傳』、『勅修御傳』等、凡そ御房の傳説で、この事實を傳へてゐないものは無いわけである。この一つの事實から觀ても、大原問答が、宗門の傳播史上、いかに重要な役割を演じてゐたかといふことが推察できる。

五

尙ほ又、この問答は、一宗の宗義史の側から觀ても、一つの重要な意義をもつてゐたといふことが、推測せられる。

夫れは、いかなる宗派にしても、苟もそれが一つの「宗」として立つてゐる已上、そこに獨自な「宗義」といふものをもつてゐるといふことは、上述の如くであるが、その獨自な宗義が、實際に宣布されてゆく上に、時にその對手に由つて、正面からではなく側面からされるといふやうなことがあるが、是は誠に當然な事柄だと思ふ。

現に御房の御法語を拜見してみても、「九條殿下の北政所

へ進ぜられた御返事」の中に、君達などの御いのりの料にも、念佛がめでたいとか、又「十二問答」に、極樂の九品は彌陀の本願ではない、釋尊の巧言だなんていふことが申されて在るのがそれである。

處で今この問答は、何分にもその對手が、當時一流の學匠達であり、聖道の偏見に固まつた智者學者をその對象としてゐたのであるから、御房のそれに對する論述も、多少つねの場合とはちがつたものがあつたといふことを想像しても、必ずしも不當ではあるまいと思ふ。

後に鎮西上人(三)聖問上人(七)などが現れて、「微選擇」や『頒義』にみゆるやうな説を唱出されるに至つたのも、源をこの問答の、御房の論述の態度に採られたものと觀るのも、強ち不可ではないと見らるべき理由がある。

この意味をいいて、大原問答は、宗義の取扱上、一つの大切な態度を暗示してゐるものとも、觀ることが出来るのである。

六

問題が聊か横道にそれて、話が太どぎちないことになつたが、茲で私は、本題にたち還つて、この「問答」の性

質について述べてみたいと思ふ。然しそれには、顯眞法印が何ういふところよりして、こうした會合を發起されるに至つたか、先づそのことよりして、明らかにして掛らなければならぬ。

だいたい顯信法印は、京都の公卿の子で、父は美作守藤原顯能、母は參議藤原爲隆の女であつたと云ふ。崇徳天皇(五世)の天承元年(皇九一七)の出生とあるから、わが御房よりは二つ年長者であつたことが解かる。

出家の年時は、明らかでないが、幼少のころ叡山に登り、堀河院(三代)の御二の皇子最雲親王(親井)について出家し、天台は明雲座主(五世)、密教は相實法印について學び、夙くすでに權小僧都の位に補せられてゐたといふことである。

處が承安三年(皇三八)、法印四十三歳の時(室祖開宗の前々年)、遽に僧都の官を辭し、大原(或は小原)に隱遁をされることになつた。

隱遁の動機は、能くは解らないが、名利の學道をいとひ菩提を求むる念の切なるものに動かされたものであつたことは疑ひない。恰度さうした矢先(二年)後白河の院の後で、高倉院(十)の御生母に在しました建春門院が崩御を遊ばされた。そこで、その御中陰の御菩提に、法住寺(蓮花王院)に新法華堂を建て、叡山から正覺房眞惠といふ者を御召に

なつた。眞惠は當時、叡山四種三昧院の隨一たる法花堂(半行半座)の十二禪衆の一人であつたが、法印はその眞惠の闕を聞いて、進んでその跡を補欠せんことを申し出られたといふことが、『勅修御傳』第十四卷に見へてゐる。舜昌法印(勅修)が、當時の法印の心境を叙べて――

是即ち、出離の道たやすからざる事をなげきて、名利の學道をのがれ、籠居すといへども、決定出離の直路、思案いまだ一決せず、晝夜に此事をのみなげく處に、十二禪衆の闕を聞くと、かの半行半座の行法は、天台大師御筆の法華經を本尊として、傳教大師弘仁三年七月に草創したまへる要行なり。これ出離生死の直路なるべしと、おもひより給ひて、十二禪衆に列し給ひにけり。

と申されて在る。

斯くして、求めて而かも得られない惱の裡に、八年の歲月が流れて逝つたのであるが、壽永二年十一月(皇四一八)、木曾義仲が都へ亂入して、畏くも高倉上皇(當時は安徳)を法住寺に攻め參らせたといふことが有る。その時、法印の師範に在した明雲座主も、流矢にあたつて非業の御最後を遂げられることになつた。『十卷傳』の三に

先師大僧正(明雲座主)は、村上天皇(三代)の御子、具平親王

五代の後胤、太政大臣雅實の孫、權大納言顯通の子なり。王種に出づる六代、槐門を去る幾からず。四明三千の貫首に居し、一乘止觀の棟梁たり。花族人に過ぎ、英才身に餘る。

然るにいま不慮に、凶徒の狼藉により、存外の犬死に逢ひたまふ。三界無安、猶如火宅、誰か厭離せざらんやと。

かくて法印は、今や全く、立つても居ても堪らない境地に這られたものと思はれる。乃で法印は、兼て同志の先輩であつた慧光房の永辨法印を訪づれて、心の底を打ちあけられたところ、所詮こうした問題は、吉水の法然御房に指導を仰ぐが良いといふ譯で、遂に文治二年、今の謂はゆる「大原問答」が催されるに至つたのである。併し愈々その運びになる迄には、尚ほ若干のいきさつがあつたことは、「勅傳」その他に見えてゐるとほりである。

然るに、徳川初期の著作たる、眞宗了意(山崎本)の「句解」といふものを見ると、「有人云、興の御書とは、大原問答の起の御書の意なり」——といふことが申して在る。

勿論「有人」といふのであるから、了意自身の説でないことは言ふ迄もないが、「大原書拔」の一にも、復た同様の

ことが述べられてゐる所からみると、當時坊間では、そんなことを言觸らした者が、在つたやうである。

「興の御書」といふは、近くは望月博士の「法然上人全集」附録の内に拾録されてゐるもので、その原本は、現に黒谷(廣洛)の金戒光明寺に傳へられてゐるものが、それだと言はれてゐる。

想ふに是は、例の史感に乏しい眞宗側の末徒が、自分たちの御開山を擔ぎあげるが爲めに、大原問答と「教行信證」にいつる眞影云々の傳説とを合様して、偽作したもので、元より一笑に附しやつて可いわけである。

それでこの問答は、前述のやうに、眞法印の、止むにやまれぬ求道心に根ざしたものであつたことは、毛頭疑を狭む餘地はないわけで、例の破邪顯正とか、宗門の優越性とかを振廻さんとするがごとき、「宗我」の念に驅られたものでは、斷じてなかつた。

然し、何をいふにも、當の發起者たる眞法印が、知名な天台の學者であり、従つて、そこに集つた一座の面々が、いづれも皆當時の堂々たる學匠であつたがため、談義の内容が、自然に學問的になつて、頗るむづかしいことになつた譯であるが、問題の中心は、どこまでも生死の問題——

即ちたいまいひの問題から離れたもので無かつた。

もつとも、談義に集つた連中の内には、例の彌次馬も雜つてゐたで有らふし、心中また密かに、宗論のやうな氣構へで、遣つて來たものも有つたであらうといふことは、恐らく事實であつたと察せられる。皆こそ熊谷の「鈍捨藪」のやうな傳説も起つてくるといふ譯である。

「酉譽上人(彌山等)」の作と傳ふる『大原見聞私』といふものを見ると、この問答の行はれた時、熊谷の入道が、御房の萬一の場合を氣遣つて、私にお伴を致したといふことが云つてある。現に今も傳へられてゐる「腰掛石」、「鎧が池」、「鈍捨藪」は、その遺跡だなどいふことが申されてゐる。

成る程、文藝的な構想としてはちよつと思ひ付ではあると思はれるが、もとより信するに足るものではない。だいたい熊谷の入門は「翼讚」などの説でみると、建久四年四月のことで、この「問答」からは、七年も後のことに屬してゐる。もつとも當時は、開宗後、日なほ淺いことでもあり、殊に聖道諸宗の側からは、一種のひがんだ眼で睨まれてゐた時なのであるから、全然さうした危險が無かつた譯でもなく、又た例の彌次馬の内には、事實熊谷の手を煩はさんければ、ならない様なものも有つたかも知れないが、

いづれにしても其等は、この談義の「お添へもの」で、主たる役目を果たすものでは無かつた。

夫ゆへ酉譽上人は、その著『大原談義見聞』のなかに、この會合を「談義」といつて、「問答」とは言はないのだと、云ふやうに申されてゐるのであるが、これとても古來その用例上に、一概にさうした嚴密な區別がされてゐた譯ではなく、又た必ずしもする必要もないと思ふ。要は、意を得て解しさえすれば、談義といふが問答といふが、別に不可はないと考へられる。

それで自分は、この大原問答は、前述のやうな意味ありよりして、當時の「學匠たちの信仰座談會」であつたと思ふ。もつと「チャーナリスチック」な表現を用ゆるならば「法然御房に物を聽く會」であつたといへば、更に適切だと思ふ。

之を要するに、大原問答は、たゞ單に冷やかな理論をあけつらふといつたぎこちないものではなく、更に之を宗門の教會史、宗義史の側からみても、一つの重要な意義をもつたものであつたことが解かる。従つて夫れは、單なる過去の歴史上にをける一つの談義として、看過すべきものではないと、自分は信するのである。

編輯後記

◇新緑もえて體位向上にはもつとも宜しい氣節です。強い日光を求めて野に山に都會の人々が歩くことが行はれてゐます。自然を見失ひかけた人々にとつてはせめてもの努力でせう。

◇また野に山に團體で旅行を試みることも盛んに行はれてゐます。誰しもが外に出ると開放的になるためか、團體行動に十分でない點が見出されます。しかし團體で行動する以上は旅行と云へども一つの訓練であることを忘れてはなりません。従つて他に多少なりとも迷惑を及ぼすが如きことのないのは勿論のこと、厳格な規則の下に動作をしなくてははいけません。

◇近頃いろ／＼な物資の配給が

切符制になつて來ました。この切符制には必ず必要以上の餘分なもので受取る人が出來るといふ缺點があります。だから若し配給を受けて少しでも餘分なものが残つたらすぐそれを他に活用し、不足な人の方に廻さなくてははいけません。

◇近頃は一般に行儀が悪くなつたとよく云はれてゐます。禮儀なり普通の道德心なりは日常生活に一刻も缺くことが出來ませんのにそれが衰へて來たと云はれるやうではなりません。少なくとも本會會員だけは他が何うあらうとも毎日眞剣に暮し、社會を沈黙の内に化導してゆきたいと念じます。

◇吉田綾二郎先生から「郭公の鳴くころ」と題する玉稿をいただき深謝いたします。

◇子母澤寛氏から「俗人俗の記」をいただき、このやうな隨筆はまさに先生の獨壇場であります。

◇臨本樂之軒氏は東京美術研究所を主宰する美術評家論として著名な方です。われ／＼が日常よくてならぬ「筆の知識」について解説下さいました。

◇中村辨康師の「佛前結婚式の話」は近頃特に多くなつて來た佛前結婚の解説でもあり、宣傳でもあります。會員諸氏のお知合ひには是非佛式の舉式を推舉下さるやうお願いいたします。

◇會費や圖書御註文は必ず前金拂ひでお願いいたします。

◇住所變更の場合は前住所も併せ御明記下さい。

◇振替用紙の通信欄は十分に御利用下さい、本會に對する御希望等をお書き願ひます。

◇各支部では是非とも「淨土」の輪讀會をお催し下さい。これは會員が集つて雜誌を読み合つたりお互ひにいろ／＼と意見をのべ合ふものであります。

淨土 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六年五月十日印刷納本
昭和六年六月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇

編輯兼 眞野正順

發行人 赤尾光雄

印刷所 大日本印刷株式會社

東京市牛込區板町七

發行所 法然上人鑑仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ケ年 (送料共)

！ 峰 高 最 の 書 用 教 布 ！ 刊 新

我が信仰

四六判二色刷表紙付
定 價 六 錢（送料三錢）
二十部以上一時に購入
の方には一部五錢とす。
法然上人鑽仰會編

— 内 容 —

知恩院	本願	懺悔	念佛	往生
岡本かの子	佐藤春夫	吉田絃二郎	武者小路實篤	郁芳隨圓

この時代の信仰は？ 念佛の眞骨頂は？ 法然上人は？ 文壇の巨星が隨筆風に表現された、新鮮な信仰の言葉は何人の胸にも法悦の燈びを點ぜずにはおかぬ！

この内容、この定價！本書こそ布教用書の最高峰を行くものである！

文壇の巨星が語る信仰の體驗！

七八一二八東京藝大
館會照明園公芝京東

會 仰 鑽 人 上 然 法 ・ 所 行 發

法然上人鑽仰會刊行圖書（一部）

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

法然上人鑽仰會編

（菊版二一〇頁總ルビ付）

念佛讀本

定價二十錢
送料三錢

中村辨康著

（四六版八〇頁總ルビ付）

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

（菊半裁一四四頁總ルビ付）

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ボ總ルビ、三〇〇頁

法然上人掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

◇御注文には小爲替または送金と通信とを兼ねた振替利用が御便利です。

◇送料をお忘れなきやう願ひます。

◇端書での御注文はお断り致します。

生、死、佛、本願、信と行、念佛の集ひ、社會生活、女性、家庭生活念佛の意義の各項目に別けて本宗の新鋭が、一般讀者を目標に新鮮な材料によつて解説した念佛信仰の手引！

非常時局下、人心の確固たる統一を期する時、一道の光明燦然として信仰の正道を指し示す。萬人のための宗教、淨土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。浩瀚なる上人御遺文中より、現代生活に最も適切なものを選んだ句々金玉の聖句、これぞ生活の根底である。

大毎、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放菴畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年五月廿日印刷納本 昭和十六年六月一日發行

淨土第七卷第六號

定價金十二錢（送料五厘）
外埠定價金十三錢